

要から北原白秋、高村光太郎にも及ぶ。原子朗・小沢俊郎編による『宮沢賢治論』全三巻（一九八一）がある。

（宮崎芳彦）

恩地孝四郎 おんちこうしろう 一八九一〜一九五五（明24〜昭30）

版画家、挿絵画家、書物装幀家、随筆家。東京に生まれ、東京美術学校を卒業。一九一四年、田中恭吉等と詩と版画の雑誌「月映」を創刊、生涯を通じて詩と木版画を制作。一八年、同志と日本創作版画協会を創立、新版画運動の指導者となる。竹久夢二、北原白秋に親近し、両者の著書をはじめ児童文学書をふくんで数百の書物の装幀を手がけ、その集成に『恩地孝四郎装本の業』（一九八二）がある。詩・版画集に『海の童話』（三四）、童話歌劇集に『ゆめ』（三五）、児童向きの美術論に『人間のつくる美』（四九）など。英米児童文学の翻訳者恩地三保子はその娘である。（匠 秀夫）

恩地淳一 おんちじゆんいち 一九〇六〜八四（明39〜昭59）

詩人。山陰の倉吉で生まれる。一五歳の時から童謡をつくりはじめ、「金の星」「童話」「赤い鳥」などに投稿した。一九三五年（昭10）、小春久一郎、木坂俊平らと大阪童謡芸術協会を創立、「童謡芸術」を刊行。六三年、関西歌謡芸術協会を創立、理事長となり「歌謡列車」を主宰した。童謡詩集に『風ぐるま』（一九六七）、『春はどこまで』（一九六九）、『タンポポわた毛』（七四）など。ほかに詩謡集、民謡集もある。（尾上尚子）

恩地三保子 おんちみほこ 一九一七〜八四（大6〜昭59）

英米文学翻訳家、画家。恩地孝四郎の娘として生まれ、一九三八年、東京女子大学英语専攻科卒業。五六年シャロロット・ジェイ『死の月』、五七年モード・ラブレイス『全訳ベツシイの高校卒業期』を翻訳し、以後ミステリーと児童文学を中心とした翻訳活動を行った。主訳書に、クリステイ『杉の柩』『満潮に乗って』（二九五八）、クリステアナ・ブランド『ハイヒールの死』（六〇）、オルコット『若草物語』（六六）、ワイルダーの『インガルス一家の物語』『大きな森の小さな家』『大草原の小さな家』『プラム・クリークの土手で』『シルバー・レイクの岸辺で』『農場の少年』（七二〜七三）、ラブレイス『ベツィーとティシイ』（七五）などがある。（三宅興子）

力

ガアグ ワンダ Wanda Gág 一八九三〜一九四六

アメリカの絵本作家、版画家。ボヘミアから移民の木

彫師の子で、七人姉妹の長女。両親に早く死なれて姉妹の親代わりをして苦勞する。が、絵が好きでカードの絵を描いたりアルバイトをしながら、ミネアポリス美術学校やニューヨークのアート・スチューデント・リーグで学ぶ。版画の個展を開き子どもの本の編集者に見いだされ、『一〇〇まんびきのね』(一九二八)で、二躍絵本作家として登場。このデザイン力抜群の作はアメリカ現代絵本史の第一ページを開いた本として高い評価を受けている。作者は続く『へんなどうつぶ』(一九)、『すにっぴいとすなっぴい』(三二)で三部作とした。ほかにアルファベット絵本の傑作と評されてくる『The ABC Bunny ABC(うさぎ)』(三三)やグリム昔話の挿絵本(三六、三八、四三、四七)、北欧昔話の挿絵本(三五)などある。どの絵本も文は活字でなく弟のハワードの書き文字が使われている。(吉田新一)

海賀変哲 へんがてつ 一八七一一一九二三(明4〜大12)

雑誌編集者、小説家。本名篤麿。福岡県出身。札幌農学校卒業後に、博文館に入社、雑誌「文芸倶楽部」の記者を務めた。小説の代表作には、庶民性とユーモアを含んだ『新浮世風呂』(一九〇六)、編著に『新式小説辞典』(二二)などがある。児童文学関係では博文館発行の『少女世界』(〇六 創刊)の編集に従事したことがあげられる。

ガイダール アルカージ・P Аркадий Петрович (岡田純也)

Гадаар 一九〇四〜四一 ソビエトの作家。本名アルカージ・P・ゴリコフ。教師の家に生まれ、一三歳で革命運動に加わり、一四歳の時に年齢を偽って赤軍に入隊、一六歳で赤軍最年少の連隊長になる。一九二四年、重傷を負って退役、新聞記者として働くかたわら、子どものために次々と作品を発表する。第一作『PBC 革命軍事評議会』(一九二六)、半自伝的な『ボリスの冒険』(三〇)、『*Венная машина* 軍事機密』(三五)は、革命闘争のロマンと厳しさをうたいあげ、『青い茶わん』(三六)、『セリョージャはひとり』(三九)は人生の苦しい側面を開き見せてくれる。人手を必要としている近所の家庭を助ける子どもたちの活躍を描いた代表作『チムール少年隊』(四〇)は、多くの子どもに愛読され、戦時中の出征軍人の留守家庭を手伝う少年少女の運動を全国的に巻き起こした。この作品の精神は今も「チムール運動」として受け継がれている。(中込光子)

垣内松三 まつとう 一八七八〜一九七四(明11〜昭49)

国文学者、国語教育学者。岐阜県高山市に生まれ、金沢第四高等学校を経て東京帝国大学文化大学卒業。同大学、東京女高師、東洋大学、東京女子大学、東京高師、東京文理大学などの講師、教授を歴任。欧米の科学的視野に立った独自の学説を展開、のちに形象理論を確立した。一九二二年刊行の『国語の力』は国語教育界に光芒を放ち、その根底をなすセンチンス・メソッ

ドの考え方は現場に大きな影響を与えた。『石叫ばむ』、『形象論序説』、『国語教育科学』(六二)などの名著は現在も高く評価されている。(栗原一登)

海沼 実 みかぬま 一九〇九―七二(明42―昭46) 童謡作曲家。長野県長野市に生まれ、一九三六年東洋音楽学校卒業。三三年に児童合唱団音羽りかご会創立にかかわるなど、戦前より大衆歌謡的な童謡の作曲、演奏の指導に携わる。戦前の主な作品には『お猿のかごや』『からすの赤ちやん』『ちんから峠』などがある。戦後『みかんの花咲く丘』(加藤省吾詩)、『里の秋』(斎藤信夫詩)、『見てござる』などを作曲、川田正子、孝子姉妹によって歌われ、混乱期にあった人々に広く親しまれ愛唱された。(大畑祥子)

カウフマン ヘルベルト Herbert Kaufmann 一九二〇―七六 ドイツのジャーナリスト、アフリカ研究家。一九五一年からアフリカ各地を旅行し、探検記、ルポルタージュのほか、児童文学作品も多数発表する。五八年、タマシエク族の少年の恋を描いた『赤い月、熱い時』(一九五七)でドイツ児童図書賞受賞。作品はいずれも、植民地支配から脱したアフリカの姿を正しく伝えようとしたものである。ニューヨーク・トリビューン賞なども受賞している。(若林ひとみ)

科学読み物 かがくよみもの 戦前、「児童科学書」「科学童話」「理科童話」と名づけられたもので、現在「科学の本」

「知識の本」「理科の本」と呼ばれるものの総称である。科学読み物という名称は一九五五年から使われたが、市民権を得て一般的に使われるようになったのは、吉村証子の主宰した「科学読み物研究会」が発足し、

同年雑誌「理科教室」が科学読み物の特集を企画したころからである。科学といえば、自然科学と社会科学が含まれているわけだが、現時点では、自然科学的要素の多いものを指して使われている。その範囲は、幼児から中学生を対象とした物理、化学、動植物、宇宙、地球、人体、医学、生命などの研究、啓蒙的解説、科学史、科学者の伝記、環境問題や公害、人類の歴史、考古学、進化の本など。また幼児・低学年の科学遊び、実験の本、算数の本のほか、動物文学、SFなど事実を背景にしたフィクションなども含まれる。(代田 昇)

香川 茂 しかがわ 一九二〇―(大9―) 児童文学作家。香川県高松市に生まれる。日本大学芸術学部を中退して香川師範を卒業。一九二六年上京して中学の教師となり、かたわら創作を続ける。八〇年退職後、作家生活に入る。『セトロの海』(一九六七)によって第五回野間児童文芸賞、『高空一〇、〇〇〇メートルのかなたで』(八〇)によって第二九回小学館文学賞を受賞。ほかにデビュー作の『南の島にあつまれ』(六三)をはじめとして『パオの少年』(六六)、『鳥居のサル』(七三)、『海の牧場を夢みて』(八二)など多数の作品がある。情

熱的教師の目で描く青春小説『おれたちの夢』や教育エッセイ集などもある。また月刊「中学生文学」を創刊、その編集長として、子どもたちの文学教育に力を入れてきた。この作者の一貫してめざすテーマは生命への賛歌であり、子どものもくましさへの共感である。いずれも文体がきびきびとしていて南国の作家らしい骨太の情熱を感じさせる。

(西本鶏介)

賀川豊彦 とよひこ 一八八八—一九六〇(明21—昭35)

社会運動家、小説家、詩人。徳島県板野郡に生まれる。神戸神学校時代より貧民救済に関心を抱く。のち農業協同組合運動、労働組合運動、全国神の国運動を展開し、政治・経済・文化各界に多大な影響を与える。小説『死線を越えて』第一部(一九七二)は一月に一〇〇万部を超えるベストセラー。神戸葺合新川の貧民窟で子どもに出会い児童教育にも深い関心を示す。児童文学の作品に『のぞみの国』(三三)、『馬の天国』(三三)などがある。

(大久保みどり)

柯 岩 がん → コーイエン

賀 宜 ぎ → ホーイー

学習雑誌 がくしゅう 幼稚園(保育園)および学校に通っている子どもたちに幅広い知識や教養、娯楽を与え、園、学校生活、社会生活への適応を促す意図で編集された雑誌を指す。「キンダーブック*」「フレール館)、「ひかりのくに*」(ひかりのくに)、「幼稚園」(小

学館)、「たのしい幼稚園」(講談社)、「小学〇年生」(小学館)、「〇年の学習*」(学習研究社)、「子供の科学」(誠文堂新光社)、「中〇時代」(旺文社)、「中学〇年コース」(学習研究社)などが代表的なものである。内容は発刊当初よりしだいに視覚性、娯楽性の強い雑誌に移行している。幼児向けのものとは年齢別、目的別に細分化される傾向がある。従来から「おもしろさ」と「ためになる」ことの統一が課題とされてきた。普通一般の書店で購入できるものと、園、学校、家庭への直販形式のもの(*印)に分かれているのが大きな特徴といえる。戦後の雑誌、単行本(児童書関係)の読者数が大きく変動している中で、一貫して多くの読者をもつ雑誌としても特徴づけられる。

(萬屋秀雄)

学習社文庫 がくしゅう 一九四一年(昭16)一〇月、新美

南吉の『長寛手毬と鉢の子』、射手矢貞三『少国民太平記』、塚原健二郎『黒船時代』の三冊刊行にはじまる。四九年矢野健太郎『数の生ひ立ち』ほかまで確認できる。A5判。二五〇ページ前後、戦後は二〇〇ページまで。学習社は二五年学習参考書類出版の東京・大阪の三省堂ほか四社が合同で設立。代表者西村辰五郎(陽吉・歌人)は文庫の目標を、書下し、高度な知識、やさしい表現、興味性、豊富な挿絵、廉価版とした。

(斎藤寿始子)

加来琢磨 たくま

角田光男

みかくた

一九二四

（大13）

児童文学

作家。新潟県新潟市生まれ。高等小学校卒。小学校教員を二〇年あまり務める。処女作『花と小人』が朝日新聞懸賞募集で入選（一九五四）、同時期に新児童文化研究会に参加。一九六四年に上京し創作に専念する。

写実的な『日本海漂流隊』（六〇）、『よみがえれ大地』（七二）、民話調の『森の子村の子キツネの子』（七〇）、『雪ん子の花よめさん』（八〇）ほか郷里を舞台にした作品が多い。

（佐々木純子）

学年別童話

どくわんべつ

読者の発達段階に対応すべく、学年別にまとめた童話集を指す。第一次大戦後、

「赤い鳥」を中心にした文芸教育の発展として、学校では創作鑑賞指導が盛り上がり、読本批判から鑑賞読本、副読本として童話集が使われた。児童雑誌も学年別、性別による細分化が行われ、読み物も年齢に応じ

たひとまとまりの童話集として出版された。その後、学年別の区分は必ずしも子どもの個人差に適合しないことがわかり、今日ではあまりみられなくなっている。

（萬屋秀雄）

郭沫若

まつじやく

↓グオモールオ

角山勝義

かくやま

一九一〇〜八二（明44〜昭57）

詩人、童話作家。新潟県大和町に生まれる。小島寿夫の紹介で與田準一を知り「チチノキ」同人となる。のち、平岩米吉発行の「子どもの詩研究」にも詩作を発表。創作童話を志し、小川未明に師事。「風と裸」同人。戦中、帝国石油に勤務。戦後は、労働基準局監督官を経て熊谷組に就職。労働災害にヒントを得た長編小説『雲の子供』を「建設通信」に連載。郷土の民話集『民話の四季』全四巻（一九八一）、童謡集『みぞれ』（七七）などの著書がある。

影絵劇かげえ 光源を利用し人形の影を動かして演じる人形劇の一分野。操作する人形を直接観客に見せず、スクリーンと光源の間で人形を操作する。この形式はインド方面を中心に、西は回教圏に広がりとルコの影響下にあったギリシアに及び、東はビルマ、タイ、マレーシアからインドネシアのバリ島に至る。中国にも約一〇〇〇年ほどの昔に分布しているが、我が国では発達をみなかった。現代人形劇としては世界的にこの形式が用いられているが、「影絵劇」と呼ばれるもの

影絵劇

かげえ

光源を利用し人形の影を動かして演じる人形劇の一分野。操作する人形を直接観客に見せず、スクリーンと光源の間で人形を操作する。この形式はインド方面を中心に、西は回教圏に広がりとルコの影響下にあつたギリシアに及び、東はビルマ、タイ、マレーシアからインドネシアのバリ島に至る。中国にも約一〇〇〇年ほどの昔に分布しているが、我が国では発達をみなかった。現代人形劇としては世界的にこの形式が用いられているが、「影絵劇」と呼ばれるもの

（大藤幹夫）

は、日本で第二次大戦後独自に発達をみせた形式である。外国では一般に「影劇」といった呼び方をし、絵と劇ということばを合わせて使っているのは日本の特徴である。外国の伝統影絵の人形の多くは皮製で、人形の彩色がそのままスクリーンに映るのに対し、日本の場合人形は多く単色であるが、背景は工夫をこらした美しいものである。人形を黒で強調し、絵画的な背景にも多く表現させるこの形式は、世界的にも注目されている。

(宇野小四郎)

加古里子 かこりこ 一九二六(大15) 絵本作家、紙芝居作家、児童文化研究者。本名中島哲。福井県武生市に生まれ、八歳より東京に住む。東京大学工学部応用化学科に学ぶとともに同大演劇研究会で活躍し、自作童話劇を演出したことから児童文化に関与するようになる。大学卒業後、民間化学会社研究所に勤務するかわら、「民主紙芝居集団」に属して紙芝居運動に携わる。まもなく、東大セツルメントにも参加し、その子ども会リーダーとしての多彩な活動の中で紙芝居も生かされ、実践からつくられた『わっしょいわっしょいぶんぶんぶん』は、のちに出版された。その後、『おたまじゃくしの一〇一ちゃん』など数多くの紙芝居を手がけ、紙芝居研究にも力を注ぎ、その業績は一九八五年度、高橋五山賞特別賞を受賞。紙芝居活動と相前後して、人形劇にも関心を寄せていたが、絵本づくり

にも着手し、『だむのおじさんたち』(一九五九)を第一作とする。以後次々と絵本を送り出して絵本作家として知られるが、主として『だるまちゃんてんぐちゃん』(六七)にみられるような楽しい内容と、『かわ』(六六)、『海』(六九)などのような科学性が追求され、いずれも子どもが喜んで手にする本として定評がある。また、日本に古来伝わる遊びにも注目し、『伝承あそび読本』(六七)、『子どもと遊び』(七五)などの著書も多い。児童教育キヤスターとしてテレビコラムにも出演し、東京大学教育学部ほかに非常勤講師として教鞭も執る。

(上地ちづ子)

仮作物語 かさくもの 明治期の文芸用語。Fictionの最初の訳語として用いられ、広く虚構、空想物語の呼称になった。心理学者松本孝次郎は『実際の児童学』(一九〇二)において童話の分類に、(1)仮作物語(2)実際の物語(3)理科的物語(4)歴史の物語とし、(1)は「鬼神談・妖怪談・寓話・仮作せる児童文学小説を含む」と述べている。また、文部省は小学校国語教科書の仮作物語を懸賞募集し、その当選作品集に『訓仮作物語』(〇八)を書名としている。文学教材を意味していることが理解できよう。

(滑川道夫)

梶田半古 はしかた 一八七〇—一九一七(明3—大6) 日本画家。本名錠次郎。東京生まれ。父は金属彫刻家政晴。鍋田玉英に師事し、南宗派を研究、人物・花鳥・

山水画を得意とする。富山県工芸学校で一八九八年より三年間教えた。赴任直前の一〇月、女流作家北田薄氷と結婚、帰京後は、博文館の小説雑誌や少年雑誌「少年世界」などの挿絵にも活躍した。薄氷が男子を残し二五歳の若さで歿したので、半古が『薄氷遺稿』（一九〇一）をまとめた。

(福田清人)

櫻葉 勇 いさむ かしは 一八九六〜歿年不詳(明29〜?) 口演童話家、幼児教育家。和歌山県の生まれ。和歌山師範卒後上京、日本大学卒。白梅短期大学教授、櫻の実幼稚園長。はじめ東京下町で貧児の教育に携わる(一九二一〜三〇)。この間童話における口演形式の必要性を認識、その研究と普及に努め、童話教育会を創立(二七)し、機関誌「童話教育」を発行した。著書『おかあさん童話集』(六〇)は、幼児の「おはなし」における母親の役割を具体化したもの。そのほか童話集『猫の卵』(二六)などがある。

(飛田文雄)

貸本屋

かしば
んや

鹿島鳴秋 かじま
めいしゅう 一八九一〜一九五四(明24〜昭29) 童謡詩人、童話作家、学校劇作家、児童雑誌編集者。東京深川に生まれ、六歳の時父の失踪と母の再婚のため祖父母に引き取られたという。小学校を卒業して商業徒弟となり、夜学で商業学校に通う。二〇歳の時処女作の童話『塔の姫』が「東京日々新聞」の懸賞に入選、選者だった巖谷小波の知遇を得、児童文学の世界に足を踏み入れる。明治期の末より中西屋書店や丸善に編集者として勤め、童話作家協会の年刊『日本童話選集』六冊(一九二六〜三二)の出版も鳴秋の尽力による

ものであった。大正初期には自ら小学新報社を興して雑誌「幼女号」「少年号」「少女号」を刊行、自作の童話や童謡も発表した。^{*}編集者に清水かつらを擁したこれらの雑誌は、作曲家弘田龍太郎の協力も得て大正期大衆童謡の一つの拠点となった。昭和期に入って出版事業に失敗、中国東北に渡って「満州日日新聞」学芸部長を務め、編著『満州童話集』(四二)などを出版、敗戦により帰国、以後は学校劇の創作が多かった。作品には、童話集として『お伽十二階』(二一)、『お伽図書館』(二二)、『キャベツのお家』(二七)など、岡野栄、^{*}細木原青起などの絵による『オハナシ』(二三)五冊は絵本史に記憶される作品。童謡集としては『鹿島鳴秋童謡小曲集』(二九)を出したのみだが、小曲集中の『浜千鳥』や『金魚の昼寝』『お山のお猿』は広く歌われた。学校劇方面では『学校童謡劇集』上・下(四八、四九)、『学校歌劇脚本集』(五一)、『児童音楽劇集花の牧場』(五二)などがある。『浜千鳥』は新潟県柏崎の海岸でつくられたとの説があり、同地に詩碑が建っている。

(長田暁二)

梶山俊夫 かじやま としお 一九三五(昭一〇) 絵本作家。東京に生まれ、日本大学芸術学部デザイン科卒業。一九六二年に非具象の作品でシェル美術賞。六三年渡欧、帰国後に全国の国分寺や廃寺跡を巡る。木島始と組んで絵巻「鳥獣戯画」の絵本化「かえるのこぼろび」

(二九六七)、天野祐吉作『くじらのだいすけ』(六七)の挿絵で絵本づくりにかかわる。『かぜのおまつり』(七三)でBIB世界絵本原画展金のリング賞、『こんこんさまにさしあげそうろう』(八二)で絵本にっぽん賞大賞を受賞。古版本を研究し、和紙を愛し民画風のおかし味とこくのある表現を得意とする。(松居直)

鹿地

巨 わたる

一九〇三(八二)明36(昭57) 小説家、評論家。本名瀬口貢。大分県生まれ、東京大学国文科卒業。在学中より社会文芸研究会を組織し、新潟県木崎村の農民争議にも参加活動する。一九二六年には「無産者新聞」の「コドモせかい」欄に童話を書き、

ナツブ機関誌「戦旗」に童話を書くなど、プロレタリア児童文学の草分けの一人である。三〇年に『労働日記と靴』を書き小説家として活動。ナツブに評論も書く。第二次大戦中は中国の解放区にて反戦運動を展開、戦後帰国して『平和村記』(四七)、『脱出』(四八)等の記録的小説を発表。また米国によるスパイ謀略事件に巻きこまれ、抗争したことは有名。(大岡秀明)

梶原一騎

かじわら いっき

一九三六(八七)昭11(昭62) 劇作家。本名高森朝樹、熊本県生まれ。高森朝雄のペンネームも使った。早大在学中から少年小説、スポーツ記事を書き、スポーツ新聞記者を経て劇画の原作を手

かけ、劇画作家という地位を確立した。川崎のぼる画『巨人の星』(一九六六)『週刊少年マガジン』の爆

発的人気はヘス・ポーツ根性漫画』という名称を生んだ。*ちばてつや画『あしたのジョー』、ながやす巧画『愛と誠』と作品多数。暴力傷害事件を起こして逮捕され有罪判決後、自伝的作品『男の星座』執筆中に病死した。

(石子 順)

カスキン カーラ Karla Kuskin 一九二二—ア

メリカの絵本作家、詩人、イラストレーター、批評家。『あめのひつてすてきだな』(一九五七)、『どれがぼくかわかる?』(五九)など、ユーモアあふれる多くの絵本を創作、また子ども時代の経験をもとにして優れた児童詩を発表、主な作品に『In the Middle of the Trees 森のまん中で』(五八)、『アルファベットの本』(六三)、『Night Again 夜ふたたび』(八一)などがある。また、ニコラス・チャールズの名前でも執筆。(早川敦子)

カーター ピーター Peter Carter 一九二九—イ

ギリスの児童文学作家。最初大工をしていたがのちにオックスフォード大学に入り、卒業後教員をしながら作品を書き、『果てしなき戦い』(一九七四)で認められ作家活動に入る。この作品はイギリスへのバイキングの侵入を扱いながら、中世のカトリック教会を痛烈に批判している。その後もイスラム教徒とキリスト教徒の戦いを描いた『運命の子供たち』(八二)など重厚で思想的な歴史児童文学を次々と発表している。(犬飼和雄)

課題図書

かだい

広義には、学習または読書の指導に

当たり、学習者に課題として指定する図書をいう。とくに、読書会を行う時共通読み物として課す図書を指す場合が多い。狭義には、全国青少年読書感想文コンクール(全国学校図書館協議会、毎日新聞社共催)で第八回(一九六二年度)より自由読書(第一類・フィクション、第二類・ノンフィクション)と並んで課題図書(第三類)の分野が新設され、読書感想文のために指定された図書をいう。(黒沢 浩)

カタージェフ ワレンチン・ロバレンツェフ Валентин Петрович

Караев 一八九七—一九八六 ソビエトの作家。南ロシアのオデッサに生まれる。第一次世界大戦、社会主義革命後の国内戦に参加した後、オデッサに帰り、作家活動をはじめ。一九三六年、革命下のオデッサを舞台とした少年向けの大ロマン『孤帆は白む』を発表。以後連作『草原の村』『冬の風』『ソビエト政権のために』を書き、六二年にこれらの四部作を『黒海の波』としてまとめた。『黒海の波』は雄大な構想の物語で、児童文学の傑作として世界的に知られている。このほか民話風メルヘン『七枚の花びら』(一九三七)、国家賞を受けた第二次大戦の物語『連隊の子』(四五)などがある。雑誌『青春』の編集長として、E・エフトウシエンコ、V・アクシヨノフ、A・ヴォズネセンスキーなど、才能ある新人作家を育てた。『時よ進め!』(三二)、『Космоу канодеву 聖なる井戸』(六七)、『Трава

『Забавная 忘れな草』(六七)と、優れた大人の小説もある。
(北畑静子)

片岡鉄兵 てつぺい 一八九四―一九四四(明27―昭19)

小説家。岡山県生まれ。慶応大学などに学ぶ。一九二四年、横光利一らと「文芸時代」を創刊。二八年五月に全日本無産者芸術連盟(ナツプ)が結成されるとその一員に加わり、三二年九月に転向するまで数多くのプロレタリア作品を発表。児童文学は、大正末期から「少年倶楽部」「少女倶楽部」などに発表。代表作としては、「少年戦旗」に発表した『源さんとなみ子』(三〇)があげられる。

(五十嵐康夫)

カタカナ・ひらがな童話 カタカナ・ひらがなどうわ タイトルも本文も全文片かなまたは平がなの完全分ち書きの童話。

その歴史は戦前時代にさかのぼる。学校教育が小学一年生で片かなを先習させ、平がなは二年生からだったので、これに対応して出版社が「カタカナドウワ」「ひらがなどうわ」と銘打った童話の本を出版するようになった。一年の国語教科書でも「山」「川」など字画の少ない少数の漢字はあったが、全部かなの本にしたのは、子どもの識字力を低く設定して読みやすさを図る出版政策に基づくとみてよい。戦後の学校教育は新聞紙をはじめ社会的に使用されている「漢字まじりひらがな文」の表記に早く適応させるために平がなを先習させるようになった。そのため、片かな童話の

出版は激減して平がな童話の本が主となった。¹⁰岩波の子どもの本『シリーズ(一九五四―五五)』を例にとると、

〈幼・一・二年むき〉のグレード指定の本は、一、二、三などの漢数字以外平がなの本と、ごく少数のルビつき漢字入りの二種類があるが、「ひらがなどうわ」と銘打っていない。

(関 英雄)

片上 伸 のぶかみ 一八八四―一九二八(明17―昭3)

文芸評論家。愛媛県越智郡に生まれ、一九〇六年早稲田大学英文科卒業。同大学講師となり、天弦の号で自然主義文学派の文芸評論で活躍。一〇年早稲田大学教授。一五年ロシア文学研究のためロシアに留学。帰国後、ロシア文学科を創設し主任教授。留学で知り合った山本鼎の自由画教育運動に協力し、自らも従来の修身教育を批判し、文芸による道徳教育の必要性を文芸教育論として提唱する。『片山伸全集』全三巻(一九三八)があるが、『文芸教育論』(二二)はことに著名。

(上野浩造)

加太こうじ かたこうじ 一九一八―(大7―) 大衆文

化評論家。紙芝居作家。本名加太一松。東京浅草に生まれ、尾久に育ち、尾久西高等小学校卒。高小二年生のときより紙芝居製作のアルバイトをはじめ、卒業後は本業とする。仕事のかたわら太平洋美術学校に通い、一九三八年に卒業。紙芝居製作においては、由井正雪の反乱計画に蜘蛛の精の魔人をかからめた『天誅蜘蛛』

(一九三四)が人気を得た。第二次大戦後も活躍したが、五〇年代末のテレビの登場によって紙芝居が衰退すると文筆業に転じ、思想の科学研究会に加わって大衆文化・大衆児童文化の記録・研究に従事。半生をつづつた『街の自叙伝』(六〇)を処女出版として、紙芝居に關して『紙芝居昭和史』(七二)、大衆文化論に『街の芸術論』(六九)、『下町で遊んだ頃』(七九)などの著書がある。八六年より中京地区にある日本福祉大学教授。

(野上 暁)

片平庸人 かたひら つねひと

一九〇二—五四(明35/昭29) 童謡

詩人、民謡詩人。宮城県生まれ。「赤い鳥」「金の船」「童話」などに童謡を投稿、とくに「童話」誌上で活躍した。良寛に共鳴して越後に赴き、児童文化活動に取り組んだあと、一九三〇年に函館へ転じ、詩作を続けた。洗練されたタツチで澄明な抒情をうたった童謡が多い。童謡集『ほうほうはる』(一九三四)、『日時計』(六三三)、民謡集『鴉追ひ』(三七)、『不惑貧乏』(四八)などのほか、遺稿集『青いツララ』(七八)がある。

(畑中圭一)

片山昌造 かたやま しょうぞう

一九二一—(明44) 児童文学作家。本名昌村。埼玉県川越に生まれる。大正大学

英文学科卒。はじめ小説を書いていたが児童文学に転じた。『明け行く支那』(一九四二)は、当時、我が国の児童文学界に数多くあつた中国大陸に取材した作品の

一つで、短編中心の生活童話の中にあつて、この作品は物語性とヒューマニズムをもった作品として注目された。しかし『ヘイタイサントシナノコドモ』(四二)と同じように体制に即していたことは否めない。戦後は『花ようるわしく』(四七)、『ミニーものがたり』(五一)のような読み物を書いていたが、『あかつきの子ら』(五六)で基地問題を描いて社会派的傾向をみせ、また『脱走者たち』(七三)では自由を求めて放浪する犬を描いて、主題に重きをおいた作品も書いた。

(向川幹雄)

語部 かたがら

大化前代には伝承を語るのを職としていた部民だったというが、正倉院の戸籍・計会帳などに名がみえる語部は、普通の農民化している。ただ、平安時代にも大嘗会の卯の日の儀式には、諸国の語部が古詞を奏するということが続いていた。『儀式』では美濃・丹波など七国からだか、『江家次第』では三國に減じている。別々の文言で、祝詞に似たところや歌声にわたるものがあつたというが、詞章は残っていない。

今でも茨城県には「これは俺家のかたりべだが」と家伝のことをいうところがある。

(益田勝美)

かつおきんや 一九二七—(昭2) 児童文学作家、児童文学研究家。本名勝尾金弥。石川県金沢市

に生まれ、金沢大学教育学部卒業。大学在学中児童文化サークルに所属し、人形劇に関心をもち、卒業後金沢市内の中学校で教壇に立つて演劇教育・文学教育・

作文教育の實踐に励む。一方、少年時、中国東北部で過ごしたことから中国児童文学の翻訳にも携わる。一九六一年北陸児童文学協会に入り、歴史小説の創作をはじめ、郷里金沢・能登など北陸に取材した作品を発表する。中でも『天保の人びと』(一九六八)は力作で、第一六回サンケイ児童出版文化賞を受賞した。「苦しい生活をしいられてきた農民たちの無言の抗議」を、かつおきんやは取りあげ作品化する。それらは『辰巳用水をさぐる』(七二)、『五箇山ぐらし』(七二)、『能登のお池づくり』(七三)などに結実し、第一回泉鏡花記念金沢市民文学賞を得た。ほかに『安政五年七月十一日』(七〇)、短編集『百万石のうらばなし』(七三)などの作がある。かつおは、能登・金沢を中心とした郷土の歴史を掘り起こし、民衆の生活が歴史の根底にあることを自覚する。そこから創造者として個性をもった子どもを描き、過去に生きた民衆との対話を試みる。そして歴史の中の人々の喜び、悲しみ、怒りを描くことによつて、現代を生きる人々の生き方をはつきりさせようとしているのである。平明達意な文章と確かな構成、さらには主題の明確性は、その歴史小説の特徴であり、それは誠実で温和な作者の性格の反映ともいえる。なお、研究家としての仕事に『黎明期の歴史児童文学』(七七)、『人間・新美南吉』(八三)、『森銑三の児童文学』(八七)がある。いずれも綿密な実証によつて固められ

たもので、高い評価を受けている。愛知県立大学助教。

「七つばなし百万石」ひゃくまんごく 歴史小説。一九八〇年刊。四冊目の歴史小説。幕末期の加賀藩が舞台となつている。『おかしなハダカの男の子』『トオルさま』『カッパのへ』など、加賀に伝わる七つの話をもとにして歴史小説としてまとめている。ここに登場する子どもは、しつかりとした個性をもち、豊かな創造性を生かして成長する姿が描かれている。そして、子どもの目から見た加賀の歴史が浮き彫りにされている作品である。(大石源三)

学級文庫 がっきょ 主として、小・中学校の学級ごとに図書資料を備え、その学級の子どものために供する施設で、子どもの身近な場に本などを置くため、利用されやすいし読書の指導もしやすいという特色をもつ。とくに、*学校図書館の利用技能の未成熟な小学校低学年の子どもに有効な働きかけをする。教室文庫、学級分館とも呼ばれ、単に読書施設としてだけでなく自発的学習の資料を備え学習の場でも利用される。はじめは、学級の有志による持ち寄り文庫の形態が多かったが、適切な本が得られず、学級や学校での図書費を徴収し学級文庫の経費に当てるところもあった。今日では、図書の更新や適書を確保するため、学級文庫を学校図書館の分館とし、学校図書館からまとま

た図書群の供給を受け、定期的に図書資料の更新を図ったり適書の確保に努めるようになってきている。
*読書指導や教科などの学習を豊かにするため、学校図書館の充実とともに重要視される。
（今村秀夫）

学校劇 → 演劇教育、児童劇

学校新聞がっこうしんぶん 児童・生徒によって取材、編集発行される児童生徒のための新聞。読者をその学級に限定した場合は学級新聞という。取材の範囲は学校生活に関連あるものに限られるが、クイズ、漫画、作文などで紙面づくりを工夫する。戦後、子どもの創造力を育てることから壁新聞を中心とした新聞づくりが盛んであったが、教室における文化活動全般の衰退とともにこれも減退している。
（小松崎進）

学校童話がっこうどうわ 童話教育雑誌。角書に「聴方資料中心」とある。一九三六年（昭一）四月創刊、翌三七年四月廃刊。白鳥社発行。角書に示される「聴方資料」は「読んで聴かせる童話」作品である。「学校童話五綱領」の一に「迂遠な理論よりも直ぐに役立つ資料を提供する」とある。修身、読み方の教材や指導案など教師を讀者対象とする記事が多い。坪田譲治の『ベニー河のほとり』統編（全集未収録）や後年、新美南吉の名で刊行された『大岡越前守』の原典、與田準一の『少年大岡越前守』の連載もある。
（大藤幹夫）

学校図書館がっこうしょかん

図書および図書以外の資料を

収集、整理、保存し、児童・生徒・教員の利用に供する小学校・中学校・高等学校での施設をいう。こうした学校の中の図書館は、教科学習をはじめとする学校教育諸活動の編成および展開に寄与するとともに、学校図書館の利用指導および読書の指導についての全校計画の立案、児童・生徒の直接的指導と、教員の照会相談に応じなければならぬ。我が国での近代的な学校図書館は、大正期のいわゆる自由主義教育校の中に芽生え、戦後の一九五三年に「学校図書館法」が制定されてから急速に進み、その普及率は一〇〇%に近い。しかし、学校図書館担当の専門職員の配置は学校図書館法の規定（第五条）にかかわらず、きわめて低率で、また学校教育も図書や視聴覚的資料などを利用するよう個人差に応じた豊かな学習を展開していないなど、教科学習などと直結した活動は低調になりがちである。学校図書館活動の一側面である読書活動のセンターとしての機能を發揮するのに精いっぱいである。
（今村秀夫）

学校図書館文庫がっこうしょかんぶんこ

一九五一年（昭二六）、滑川

道夫の企画・編集により、牧書店より刊行された全五

〇巻（B6判）に及ぶ大規模なシリーズもの。当時、戦中の画一的な教育の反省に立ち、学校図書館建設運動が盛んであり、教育思潮においても問題解決学習が進められ、学習指導においても文学書以外に多様な図書

資料が求められた。『児童百科事典』、『小学生全集』全一〇〇巻なども五一年に刊行されている。『学校図書館文庫』は、子どもたちに文学の読書の楽しさを説く『文学への道しるべ』、『としょかん』(滑川道夫)、解放後の中国の児童文学をも収録した『ツバメの大旅行』(斎藤秋男編)、新憲法を平易に説いた『憲法と君たち』(佐藤功)など、文学作品から非文学まで幅広い、有益な図書を収録していたので教育現場で大いに活用された。このシリーズは五五年度に、毎日出版文化賞、産経児童出版文化賞を受賞。

学校物語

のがたうも

物語の舞台を学校に設定し、複数

の子どもたちの日常生活を、事件の連続する形で描いたもので、歴史的には、寄宿学校から全日制へ、男子校から女子校そして共学へ、という流れを経てきている。学校物語のはじまりは、一八〇四年のドロシー・キルナー『*First Going to School; or the Story of Tom Brown and His Sisters*』はじめての学校生活より』あたりで、学校でのいたずらの様子などを家につづった手紙で語っている。しかし、学校物語の典型の成立としては、トマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』(一八五七)があげられる。寄宿学校のラグビー校での体験を踏まえて、校長、教師、監督生の人間味、尊重される自由と秩序、スポーツへの参加など、明るく健康的な「男の子」らしい理想の姿を追求して

おり、のちの学校物語に大きい影響を及ぼした。人氣の点ではタルボット・リードの『*The Fifth Form at St. Dominics*』聖ドミニク校の五年生(八七)、三人組の生徒の活躍という型を定着させたキプリングの『ストーキーとその仲間たち』(九九)と続き、メインの『*Swarm in May*』五月の蜜蜂(一九五五)に至って、閉ざされた小社会を取り巻く状況と、少年の成長を描き切って頂点に達し、寄宿学校を描くという歴史を閉じた。女子校を描いたものでは、一〇名の少女がそれぞれ幼いころの思い出を語るという形のラム姉弟の『レスター先生の学校』(一八〇九)から、『小公女』(一九〇五)や『足ながおじさん』(一一)など少女小説の舞台になり、E・ブライントンの学園ものにつながっていく。男女共学の公立校を舞台としたG・ケンプ『わんぱくタイクの大あれ三学期』が出版されたのは、一九七七年であった。イタリアのデ・アミーチス『クオーレ』(一八八六)では、少年エンリーコの一年の学校生活をつづつてあり、ドイツのケストナー『飛ぶ教室』(一九三三)では、教師と生徒が上下関係でなく描かれている。日本最初の創作物語といわれている三輪弘忠『少年之玉』には、学校で懸命に勉強することによって立身出世する人物が描かれており、以後、なんらかの形で学校に触れられていない作品を探すのは、困難なくらいである。古くは巖谷小波『当世少年氣質』(一八九

(二)から、佐々木邦『苦心の学友』(一九三〇)まで、それぞれの形で、の学校は描かれているとはいえず、子どもの群像という点で、壺井栄『二十四の瞳』(五二)あたりまでその成立は待たねばならなかった。宮川ひろ『先生のけっこん式』、川村たかし『ふんどし校長』、灰谷健次郎『兔の眼』は、それぞれ一九七四年に出ている。『宿題ひきうけ株式会社』(七一)、『ぼくらは機関車太陽号』(七二)などを書いている古田足日は、学校という集団をみつめ続けている学校物語の代表的作家である。(三宅興子)

カッシーリ レフ・A Лев Абрамович Кассиль 一九〇五—七〇 ソビエトの作家、ソビエト児童文学創設者の一人。最初の大作『Конбути и Швабрыца』成績簿とシワンブラニヤ』(一九三〇—三三)は二人の兄弟少年を登場させ、古い学校の成績簿とその終焉を描き、理想の国シワンブラニヤの教育の在り方をユーモアをもって描いた。ほかに長編『Врандья республики』共和国のゴールキーパー』(二八)、さらに第二次大戦を扱った中編『Великое противостояние』偉大な抵抗』(四一—四七)、『Улица младшего сына』末息子子の街』(一九四九、ポリヤノフスキーと共著)がある。(福井研介)

葛翠林 さいりん → コーツイリン

勝 承夫 かつお 一九〇二—八一(明35—昭56) 詩人。

東京四谷生まれ。東洋大学文学科卒。報知新聞社会

部を経て、一九四六年より国定音楽教科書編集委員、東洋大学理事長、日本音楽著作権協会会長などを歴任。七二年、日本童謡賞功労賞を受賞。大正末期の新興芸術運動の中から生まれた詩人で、『航路』(一九四七)、『白い馬』(三三)などの詩集がある。唱歌の『こぎつね』、『そうだん』、『灯台守』、『夜汽車』、童謡の『歌の町』(四七) 小村三千三曲)が代表作。(長田暁二)

桂田金造 かつらだ きんぞう 一八八四—一九二四(明17—大13)

教師、教育ジャーナリスト。滋賀県に生まれる。滋賀師範卒後県下の小学校教師生活が続いている時、成蹊学園長中村春二の教育にあこがれて上京、池袋時代の成蹊小学校訓導となる。国語教育研究を主にし、学園の機関誌の編集執筆に当たる。一九一七年主著『尋一の綴方』(成蹊学園出版部)において生活の自己表現説を主張して注目された。一九年退職し少年少女雑誌『白鳩』(一九二二)を創刊して活躍。島崎藤村、葛原鹵、西条八十らが執筆している。『少女自由創作』『趣味読本』智恵くらべ』ほか子ども文章指導書を残している。(滑川道夫)

家庭教育歴史読本

かていきょうりく 我が国最初の児童

向き歴史読み物叢書。一八九一年(明24)二月から翌年

一〇月まで全一二巻。博文館刊。落合直文・小中村義

象(二時池辺姓)共著。四六判。各巻一二〇ないし一七〇

ページ。挿絵も多く見開き口絵は極彩色細密木版刷。

第一巻冒頭に朱字で教育勅語を掲載、「忠孝節義の風」を養うべく、歴史上の人物の事跡を伝記物語風にまとめた。神功皇后・日本武尊などの皇族、楠木正成父子などの忠臣、加藤清正・曾我兄弟・静御前などの義士孝子貞女、平敦盛・森蘭丸などの若武者などが、華々しい詠嘆調美文で描かれ、とくに壮烈な死が賛美された。時流に乗った上に朗唱に適した文体が好まれて重版され、九八年A4版四冊に合本刊行、大正初年までも各冊三〇版を超えるベストセラーであった。以後の歴史もの児童書や教科書にも大きな影響を与え、とくに『講談社の絵本』中の歴史ものもとなり、昭和期の国粹主義・軍国主義の底流になったとみられる。

(勝尾金弥)

家庭小説

かていしよ
うせつしよ

日清戦争後、一九〇〇年に近いころから流行をみた、主として家庭の女性対象の長編を文学史上呼んでいる。日清戦争後川上眉山、広津柳浪、泉鏡花らの残酷悲惨な社会の暗黒面を描く小説の流行に対し光明、健全な道徳を文学に盛り込む必要を唱える声が起こった。その代表作の一つ『乳姉妹』序に作者菊池幽芳は「今の一般の小説よりはもう少し通俗に、もう少し気取らない、そして趣味のある上品なものも載せて見たい。一家団欒のむしろの中で読まれて、誰にも解し易く、また顔を赤らめ合ふといふやうな事もなく、家庭の和楽に資し、趣味を助長し得るやうなも

のを作って見たい。」と述べているのが、家庭小説の基本である。その源を尾崎紅葉の『金色夜叉』、徳富蘆花の『不如帰』にとるが、さらにその色の濃いのは菊池幽芳の『己が罪』、中村春雨の『無花果』、田口掬汀の『女波』、『伯爵夫人』など明治期からさらに大正初期に柳川春葉の『生さぬ仲』、渡辺霞亭の『渦巻』とその脈は伝えられた。これらはほとんど新聞の連載小説であり、大正・昭和初期には婦人雑誌の連載も類似の傾向にあった。加藤正雄、中村武羅夫、三上於菟吉、吉屋信子らの長編をはじめ、その後の新聞や婦人雑誌の連載は家庭小説の要素を帯びていた。好評の家庭小説はほとんど新派劇となり、さらに広く読まれた。大正後期女性の社会的進出を反映し従来から家庭小説の型から飛躍した線を描いたものは菊池寛の『真珠夫人』(一九二〇)あたりからとみられている。(福田清人)

家庭文庫

かてい
ぶんこ

個人が家庭の一部に児童書を置き子どもに開放して読書を勧める活動をいう。明治以来篤志家により若干行われていた。一九五〇年代の悪書追放運動を契機に子ども読書への関心が高まり文庫は全国的に増加の傾向をみせた。当時公共図書館は全国に七〇〇館あまりの貧しきで文庫がその空白地帯を埋めることになった。最初私設子ども図書館と呼んだのがのちに家庭文庫と呼ばれるようになった。六〇年代親子読書運動の発展、『子どもの図書館』(石井桃子著)

などの影響により急速に増加、やがて集团的に運営される地域文庫も生まれ地域の文庫間の連絡協力の組織文庫連絡会も各地にできた。文庫のサービスは家庭的なぬくもりときめ細かさが特長であるが経費、人手の面で永続が難しく地方自治体への働きかけ、図書館づくり運動が起り公共図書館の増加、改善に大きな貢献をした。八一年の調査では四五七文庫が数えられている。

(小河内芳子)

家庭物語のかたがら

ここでのいう家庭物語とは、〈家族〉

そのものを主たるモチーフとして書かれている物語をいう。それは、英語のfamily storyとはほぼ対応し、その源は教育読み物にある。ただ、日本には〈家庭小説〉という独自の概念を形成する一連の作品群があるので、それと区別するために〈家庭物語〉とした。そして、そうした作品として、例えば、イギリスの作家キャサリン・シンクレアの『Holiday House 別荘物語』(一八三九)や、シャロット・M・ヤングが、子沢山の田舎医者者の家庭を描いた『Daisy Chain ひなぎくのくさり』(一八五六)やドイツにおけるアグネス・ザッパの『愛の一家』(一九〇六)などが挙げられるけれど、こうした流れがもつとも顕著に現われているのは、アメリカである。L・M・オルコットが、南北戦争の時代のニューイングランドに住む四人姉妹を主人公にして描いた『若草物語』(一八六六)や、同時代の作家スーザン・

クローリッジの『What Katy Did』(ケイティイは何をしたか) (一八七二)などのケイティイもの、さらにはアメリカ中部の開拓者の一家のようすを自伝的に描いた、L・I・ワイルダーの『大きな森の小さな家』(一九三二)を初めとする一連のインガルス一家の物語などは、その代表的なものである。また、家庭に強い憧れを持つ孤児アンを主人公にしたカナダのL・M・モンゴメリの『赤毛のアン』(〇八)を含めて、ジーン・ウェプスターの『あしながおじさん』(二二)などもまた、その系譜の中で考えることができる。これは、アメリカの開拓の歴史の上で、子どものモラルの教育が、ほとんどもっぱら、母親あるいは母親を中心とした〈家庭〉にゆだねられてきたことによるものである。事実、ヨーロッパの諸国とは違って、アメリカ初期の教育読み物の書き手は女性であり、男性がその分野に乗りだしてくるのは、それが商売として成り立つことがわかってからだったといわれることも、それは大きな関係があるだろう。

(安藤美紀夫)

加藤謙一

けんいち 一八九六—一九七五(明29—昭50)

編集者。青森県弘前市に生まれ、青森師範を卒業。小学校の教員をしていたが、児童雑誌編集にあこがれ、一九二一年大日本雄弁会(講談社)に入社。同年から三年まで「少年倶楽部」の編集長を務め、大衆少年小説の牙城としてその黄金時代を築きあげる大きな役目

を果たした。野間清治社長の学校教育では十分に成すことのできない徳育を「面白く愉快に、家にいるときにも、外に出て野山に遊ぶときにも、児童の傍らに必ずわが少年倶楽部を見ないことはないというように編集」することによって達成しようという方針に沿って加藤は英知を絞った。その結果、高垣暉、吉川英治、佐藤紅緑、佐々木邦、大仏次郎、池田宣政、山中峯太郎らの読み物陣と伊藤彦造、山口将吉郎、樺島勝一らの優婉華麗な名画名場面を飾る挿絵陣とをきら星のごとくそろえ、「少年倶楽部」の部数を一躍一〇〇万部に乗せた。三六年からは『講談社の絵本』の編集に携わり、これまた人気商品にした。編集長時代の回想『少年倶楽部時代』（一九六八）がある。（高橋康雄）

加藤武雄 かとう たけお 一八八八—一九五六（明21—昭31）小説家。神奈川県津久井郡川尻村の生まれ。学歴なく検定試験で小学校准教員の免許状を取り、神奈川県下の小学校教師を務める。その間「文章世界」「秀才文壇」「万朝報」などに投稿、入選が続く。一九一〇年上京し、新潮社の記者となる。雑誌「新潮」の編集を経て、一六年「文章倶楽部」の編集主任となり、手腕を発揮する。一方、このころから創作に打ち込む。一九年第一創作集『郷愁』を刊行、新進作家として認められた。のち農民文学作家として長編『悩ましき春』（一九三二—三三）『福岡日日新聞』を書く。以後通俗小説に転

進し流行作家となった。なお、加藤には『晴れ行く山々』（三五・五—三六・四）『少年倶楽部』をはじめとする少年少女小説がある。『君よ知るや南の国』（三五）、『吹けよ春風』（三八）など単行本も数多い。童話集に『小鳥は空に』（二六）、『青空の歌』（四〇）がある。戦時中、日本少年国民文化協会の初代文学部委員長を務めた。（関口安義）

加藤輝男 かとう てるお 一九一〇—七四（明43—昭49）童話作家、童謡詩人。東京生まれ。山梨師範卒業。教師を経て毎日新聞社へ入社。「毎日小学生新聞」などの編集を経て一九六五年に退職し、文筆生活に入る。五五年には山本和夫らと児童文学同人誌「トナカイ村」を創刊した。童話集に『旗を振る朝』『青空の子どもたち』『ばらの花咲く』（以上一九四二）などがある。また戦中体験を素材にした『戦地えはがき』などの詩やルポルターージュ『マニラの小馬車』（四四）などもある。（西本鶏介）

加藤 光 かとう ひかる 一九一—四七（明44—昭22）児童文化評論家、児童劇作家。北海道で生まれ、東京で育つ。日本大学卒業。小学校に勤務し、一九三二年落合聰三郎らと学校劇研究会を創立し、雑誌「学校劇」を発行して学校劇運動を推進する。三七年に日本学校劇連盟を、三九年に日本少年文化研究所を結成、運動を拡大する。NHKに転職し学校放送で活躍。復員後、過労のため急死。著書に『新学校劇集』（一九三七）があ

る。

(落合聰三郎)

加藤まさをかとう まさお 一八九七—一九七七(明30—昭52)

抒情画家。本名正男。静岡県藤枝市に生まれる。立教大学英文科に進み、在学中に発表した詩画集『カナリヤの墓』(一九二〇)や『合歓の揺籃』(二二)が好評を博し、抒情画家として立つ。時代は少女雑誌が隆盛を迎え、少女小説の挿絵がもてはやされていた。先行する人気画家、竹久夢二の築きあげた抒情画界に、待ち望まれた新人として登場し、雑誌『令女界』、『少女倶楽部』、『少女画報』などを中心に活躍、高い人気を得る。さらに画業のみならず詩文の分野においても、抒情詩集『涙壺』(二二)、『人形の墓』(二三)、『まさを抒情詩』(二六)、小説集『遠い薔薇』(二六)、『愛の哀しみ』(二七)、そして少女小説集『消えゆく虹』(二九)の諸作品を残す。童謡としては、とりわけ『月の沙漠』が有名であり、佐々木すぐるの曲と相まつたりリズムムが長く人々に愛されている。

加藤道夫かとう みちお 一九一八—五三(大7—昭28) 劇作家、福岡県に生まれる。慶応大学卒業。戦争中に書いた『なよたけ』を戦後直ちに発表。その才能を認められる。自殺死の四年前、一九四九年児童劇『あまのじゃく』を発表。終幕に主人公の少年があまのじゃくとして自殺するシーンについて議論を呼ぶ。単調平板な作品の多かった当時、象徴的な奥行きをもつこの戯曲

の出現は衝撃的であった。ほかに児童劇『まねし小僧』、戯曲『挿話』『思い出を売る男』など。(しかたしん)

加藤明治かとう ちかぢ 一九一—一七〇(明44—昭45) 童話作家。長野県上伊那郡南箕輪村に生まれる。長野師範卒。四〇年間にわたって教職にあった。若いころは、

作歌に打ち込み、『アララギ』会員、童話創作をはじめたのは四〇歳になってのことである。信州児童文学会に入会し、一九六〇年、短編童話一二編を収録した『鶴の声』によって児童文学者協会第九回新人賞を受賞。ついで、六五年、長編童話『水つき学校』によって児童福祉文化賞を受賞。六四年以降は、六年間にわたり信州児童文学会の会長に推され同会の運営と後進の指導に尽くした。(塚原亮二)

角野栄子かど の 栄子 一九三五—(昭10—) 児童文学作家。本姓渡辺。東京都深川区に生まれ、一九五七年早稲田大学教育学部英語英文学科を卒業。出版社に勤務した後ブラジルへ渡り、世界一周をして帰国。その後、絵本、童話の創作をはじめ。処女作は、ブラジルの少年を描いた『ルイジーンニヨ少年』(一九七〇)。現在までに、サンケイ児童出版文化大賞、路傍の石文学賞、小学館文学賞、野間児童文芸賞、旺文社児童文学賞など、数多くの賞を受けている。幼年向け作品の代表に『小さなおぼけシリーズ』全二〇冊(七九—八七)

や、『シップ船長はいやとはいいません』(八五)などが

ある。代表作は『わたしのママはしずかさん』(八〇)、『ズボン船長さんの話』(八一)、『大どろぼうブラブラ氏』(八一)、『魔女の宅急便』(八五)など。ユニークな発想と明るいユーモアで、読者を楽しませることのできる、独特な感性を持った作家である。(白木諭弥)

ガーナー Alan Garner 一九三四ーイギリスの児童文学作家。チェシャー州の田舎で職人階級の家に生まれるが、高等教育を受けてオックスフォードへ進学するに及び、その二つの世界の疎隔に耐えきれなくなり、中退して作家を志す。処女作『ブリジנגメンの魔法の宝石』(一九六〇)と続編『ゴムラスの月』(六三)は、生まれ育った土地を舞台に神話伝説のモチーフを自在に展開した冒険物語で、欠点も多いが独特な迫力で多数の読者を獲得し、リアルなファンタジーという新しいジャンルを拓いた。次の『エリダー』(六五)では、それに会話を多用した鋭い心理描写が加わり、代表作『ふくろう模様の皿』(六七)では、『Mabinogion マビノギオン』の伝承に由来した怪現象が次々に起こるスリリングな物語に、思春期の少年少女が抱える重いリアルな問題が分かち難く絡み合うに至った。もつとも、それが完全に成功しているとはいいがたく、次の『Red shift 赤色偏移』(七三)でもまだ模索中の感が深い。前人未踏の分野へのその果敢な歩みは高く評価されている。その後の仕事には、劇作

や再話のほかに、子どもが世界の意味に目覚める瞬間を方言を生かした簡潔な文体で捉えた『The Stone Book 石の本』(七六)以下の四部作があるが、これに職人階級だった祖先たちを描くことによって、ことばの職人と自ら名乗るガーナーは、ついに二つの世界の疎隔を克服するに至った。(脇 明子)

金井英一 えいいち

金津正格 せいかく 一九〇六ー八四(明39ー昭59) 口演童話家。東京市に生まれ、日本大学専門部卒。在学中巖谷小波、久留島武彦などを顧問に、日大児童芸術研究会を結成。一九四五年朝日新聞大阪本社へ講演班担当として入社、以来方々を巡回する。七二年対島丸をしのぶ会を結成。全国童話人協会委員。近畿児童文化連盟顧問などを務める。七六年第一六回久留島武彦文

化賞を受賞。『話の花かご』、『海に消えた対馬丸と七四一人の学童たち』などの著書がある。(岡本光弘)

かなりや 詩と童謡の月刊雑誌。一九二一年(大10)

一〇月から西条八十を編集責任者として発行された。

題名は八十の童謡の代表作『かなりや』より内藤銀策

が命名した。二一年八月号を最後に、雑誌「赤い鳥」

を去った八十が翌年の二二年四月号で、雑誌「童話」

に登場するまでの間、その拠りどころとなった雑誌で

ある。かなりやの会の会員にはほかに、野口雨情、三

木露風、百田宗治、若山牧水、加藤まさを、本居長世、

山田耕筰などがいた。(矢崎節夫)

カニグズバーク エレイン・L Elaine L. Konigs-

burg 一九三〇ー アメリカの児童文学作家。ニュー

ヨーク生まれ。カーネギー技術研究所およびピッツ

バーグ大学大学院で化学を専攻し、一九五二年心理学

者D・カニグズバークと結婚。短期間、教職につき化

学を教えたが、のち、三人の子どもを育てながら、そ

の姿をモデルに物語を書きはじめ、ほとんどの作品に

彼女自身が挿絵をつけている。六七年発表の『魔女ジェ

ニファとわたし』と『クローディアの秘密』は、それ

ぞれ、翌年のニューベリー賞の佳作と受賞作に選ばれ、

一躍注目を集めた。友情や家出という深刻になりがち

な問題を扱いながら、奇抜な設定と明確な作品構成、

ユーモアを含む軽妙な文体によって、都会的センスを

帯びた作品としてしあがっている。続く作品に『ぼく

とヘジュージ』(一九七〇)や短編集『ほんとうはひと

つの話』(七二)があるが、前二作と同じく、日常生活の

中の子どもの意外な真実を描き出している。ほかに歴

史小説もある。(橋本紀美代)

金子みすゞ みすゞ 一九〇三ー三〇(明36) 昭5) 童謡

詩人。本名テル。山口県長門市仙崎に生まれ、一九二

〇年郡立大津高等女学校卒業。二三年、母の再婚先、

下関の上山文英堂書店に移り住み、高品館にあった同

書店の支店の店番をしながら、童謡を書きはじめた。

金子みすゞのペンネームで、雑誌「童話」に『お魚』

と『打出の小槌』を投稿。選者の西条八十に「この二

編の作品の感じはちょうどあの英国のロゼッティ女史

のそれと同じだ」と励まされ、以後、『大漁』『土』『露』

と次々と秀作を発表、西条八十に島田忠夫とともに「若

い童謡詩人中の二個の巨星」とまでいわれたが、二六

歳の若さで自らこの世を去ってしまった。その後半世

紀振りに、八二年みすゞの全作品五一一編が発見され、

『金子みすゞ全集』全三巻(一九八四)が出版されるに

及んで、彼女のあらゆるものに命を見いだす優しさが、

現代に生きる人々の心に深い感銘を与えている。

金田鬼一 かいた 一八八六ー一九六三(明19) 昭38) 独

文学者。東京に生まれ、一九〇九年東京大学独文科卒

業。第四高等学校、学習院大学各教授を歴任。『世界童話大系』第二卷(一九二七)、第三卷(二八)にグリム『子どもと家庭のための昔話』を我が国ではじめて原語から全訳する。これは岩波文庫全七卷(二九)に入り、グリム童話の紹介に大いに力があつた。また同童話一八編を自分で劇化した『グリム童話劇』二卷(四二)を出す。ほかにグリム童話一卷とアジア、アフリカなどの童話二卷を含む『新編世界童話選』(四九〜五〇)などの翻訳・再話がある。童話選はグリム、シュミットボン以外は出典不明である。著書に『らしきもの—あまいぬ・こまいぬ考その他』(五八)がある。(植田敏郎)

ガーネット イーヴ Eye Garnett 生年不詳

イギリスの児童文学作家、イラストレーター。一九三〇年代の経済不況下のスラム街の生活に触れて、児童文学の主人公として労働者階級を積極的に登場させた『ふくろ小路一番地』(一九三七)で、カーネギー賞受賞。ラグルズ一家を中心に生き生きと展開されるこの物語の二冊の続編のほかに短編集『失くして見つけて』(七四)、また、ステイヴンソンの『子どもの詩の園』の挿絵本などがある。(早川敦子)

ガネット ルース Ruth Stiles Gannet 一九三二—

アメリカの児童文学作家。バツサー・カレッジを卒業後、病院や研究所で技術士として勤務したが、母親として児童文学に興味をもち、児童図書協議会のスタッ

フとして働く間に、処女作『エルマーのぼうけん』(一九四八)を発表、「ヘラルド・トリビューン」誌賞を受賞、脚光を浴びた。熱烈な読者の要望により、連作『エルマーとりゅう』(五〇)、『エルマーと16ぴきのりゅう』(五二)を創作、この三部作は、二〇世紀幼年童話の古典となった。「どうぶつ島」に捕らわれの身となっている童の子どもを救出するエルマーの冒険は、幼児の外向きの空想力を限りなく刺激し、奔放で自由なことば遣いによる表現は、幼年童話の楽しさを広げた。挿絵は、母親のR・C・ガネットによるものだが、物語の雰囲気のみごとに描写し、この三部作に、読む喜びに加えて、見る喜びを加えたと評価されている。(渡辺茂男)

印牧季雄

すえお 一八九九—一九八三(明32—昭58)

舞踊家。金沢市出身。一九一七年より舞踊の修業をはじめ、一九年印牧パロウ研究所を創立。三二年、ソビエトに渡り、さらにドイツを経て帰国。いわゆる童謡舞踊、学校舞踊の理論的な裏付けをして、その分野での開拓者となる。引き続き各地で講習会などを開き、指導者の育成に努め、門下生も多い。戦後児童舞踊家連盟を結成、初代会長になる。また全日本学校舞踊研究会最高顧問も努めた。振付作品集に『落葉の踊り』(二八)、『荒城の月』(三四)、指導理論書に『学校舞踊・理論より創作へ』(三三)などがある。(宗宮園子)

樺島勝一

かばしちま 一八八八—一九六五(明21—昭40)

挿絵画家。本姓^な椛島。諫早市に生まれ、商業学校中退後商店員、京都市雇員などのかたわらペン画を独学、一九一三年上京、「英語精習」「海国少年」などにペン画を発表、また石川寛の筆名で政治漫画も描いた。二三年「週刊アサヒグラフ」に東風人の筆名で「正チャンの冒険」(織田小星文)を連載、二五年「少年倶楽部」に執筆開始、以後永く克明・迫真的なペン画、写真版技法による口絵、挿絵で、同誌の主力挿絵画家であった。挿絵の代表作として、山中峯太郎『敵中横断三百里』(一九三〇)、『亜細亜の曙』(三二)、『大東の鉄人』(三三)、『南洋一郎』、『吼える密林』(三三)、『緑の無人島』(三七)、『海野十三』、『浮かぶ飛行島』(三八)、『太平洋魔城』(三九)、『怪鳥艇』(四一)以上「少年倶楽部」などがある。四三年野間挿画奨励賞受賞。作品集に『椛島勝一画集』(七七)、『椛島勝一ペン画集』(七一)があり、また著書に『ペン画の描き方』(二五)がある。

(渡辺圭三)

カフアーナ ルイージ Luigi Capuana 一八三九〜一九一五 イタリアの作家、評論家。シチリアに生まれカタニア大学で法律を学んだが中退しフィレンツェに出た。新聞記者や教師をしながらミラノ、ローマと移り住んだ後、郷里に戻ってカタニア大学教授となった。その間、詩作や劇評を経て、『*Studi sulla letteratura contemporanea* 現代文学研究』(一八七九)

などの文学評論に打ち込むかたわら『*Il marchese di Roccaverdana* ロッカヴェルディーナ侯爵』(一九〇一)などの小説も書いた。フランスの自然主義の影響を受け、さらに地方性を強調したイタリアの写実主義^{ヴェリアスチスモ}を提唱し、実践もした先駆者である。児童文学にも深い関心を示し、『*Il nocchio* の冒険』や『*クオーレ*』の教訓臭と理想主義的傾向を排し、自らの理論を实践した作品も多い。シチリアの自然と、貧しい農村に生きる少年の生活を現実にしかも美しく描いた『シチリアの少年』(一八九八)や、郷土の豊かな伝承を生かした昔話風の創作『*C'era una volta* むかし、むかし』(八二)などがある。

(劍持弘子)

ガーフィールド レオン Leon Garfield 一九二一〜現代イギリスの有力な児童文学作家。海賊物語である『ジャック・ホルボーン』(一九六四)から出発し、一八世紀のイギリスを舞台に、スリの少年の物語『ねらわれたスミス』(六七)、少年鼓手の運命を描く『少年鼓手』(七〇)など、数多くの作品を華麗な比喻を駆使した物語性豊かな筋立てで書いている。喜劇『*アトレイド・ハリスの不思議な事件*』(七二)あたりからは、一九世紀に入り込むことも多い。ガーフィールドは人間がみかけとは異なることの発見をテーマにすることが多いが、それが少年たちの人間認識の開眼となる。テーマは現代的で、その意味で時代は背景にとどまっている。ギ

ロシア神話に取材した共著の『海底の神』(七〇)、『黄金の影』(七三)でカーネギー賞を受けた。独自の文体で神話の世界を再現したものである。(谷本誠剛)

鍋木清方 一八七八—一九七二(明11—昭47)

日本画家。戯作者糸野探菊の子、本名健一。東京神田に生まれ、一三歳で水野年方に師事、挿絵画家として明治風俗を情趣ゆたかに描いたが、本絵は文展、帝展に新風をもたらし、帝国美術院会員となり、一九五四年には文化勲章を受ける。文学的教養と都会的感覚によつて、清新な風俗画を多く残す。代表作『築地明石町』(二七)、『三遊亭円朝像』(三〇)。文筆にも長じ『鍋木清方文集』全八巻がある。若年のころ、児童雑誌に挿絵を寄せ、また幼年向きの石版絵本類にも彩管をふるい、児童出版美術史の上でも記憶される。(匠 秀夫)

カペーリン ベニアミン・A. Вениамин Александрович Каверин

一九〇二—ソビエトの作家。一九二〇年代に作家活動に入り、『*Два капитана*』ふたりの船長』(一九三八—四四)など、革命後の歴史をテーマにした波乱に富む筋立ての物語で、大人から青少年にまで親しまれる。四〇年代から時折発表したファンタスティックな児童文学作品を一つにまとめた『地図のない町で』(八二)は、ロシア風刺文学の伝統を受け継ぎ、社会風刺とユーモアにあふれている。(小宮山俊平)

カペル マリウス コルネルス Marius Cornelis

Capelle 一九二〇—オランダの児童文学作家、教育

団体理事、青少年向け雑誌編集者。これまで多数の作品を発表している。たとえば『*Het weggevoeren toversnoer*』投げ捨てられた不思議な綱』(一九五二)、『*De kleine nieksnut*』役に立たないもの』(五二)、『*Het avontuur van Arava*』アラワの冒険』(五二)、『*Om de Campeerse toren*』カムフェール塔の周り』(五五)、『*De kleine brandschier*』小さな放火者』(五五)、『*Sjanti, het bedelmisje*』じきの少女』(五七)、『*Door de wijde wereld*』広い世界をいく』(六四)、『*Klim op i x a a*』(六五—六七)などがある。なお『洪水がやってきた』(六二)という作品は、恐ろしい洪水の中で、ブラム少年一家が難を逃れていく様子を描いた物語。この中には、一九五三年、オランダを實際に襲った有史以来最大といわれる大洪水事件が扱われているのが大変興味深い。この作品は日本語に訳されている。(熊倉美康)

紙芝居 ばいし 連続する絵に説明をつけて演じ、劇的効果をねらった小形式の文化財。絵巻物や絵解きに源流が求められるが、前身は寄席芸能の写絵(錦絵)で、写絵から立絵が考案された。人物の二態を描いた紙をはり合わせ、握り柄をつけた人形を使って演じる立絵は、紙人形の芝居つまり紙芝居の由来となる。明治末期には、緑日のテント小屋で子どもたちに見せる街頭の紙

芝居になった。人物も背景も紙に描きこみ、何枚かを抜きながら演じる現在の紙芝居形式すなわち平絵は、一九三〇年ごろに現れ、「黄金バット」とともに普及し、街角で鈴を売って見せる街頭紙芝居は子どもの人気を集めた。これには教育面などから非難が寄せられたが、今井よねはキリスト教伝道に取り入れ、三三年『福音紙芝居』を制作する。これに刺激されて、高橋五山は三五年『幼稚園紙芝居』を刊行、松永健哉も校外教育のために紙芝居をつくる。このような教育的利用を図る紙芝居は、街頭紙芝居に対し教育紙芝居と称され、三八年に設立された「日本教育紙芝居協会」を中心に発展する。戦後、街頭紙芝居はテレビにその座を奪われ、出版紙芝居を主とした教育紙芝居は六七年ごろまで学校教材としても活用されていたが、現在では保育園や幼稚園で保育教材として利用される場合が最も多い。最近では図書館や文庫にも備えられ活用されている。また、視聴覚メディア教育の一環として子どもにつくらせたり、身近なメディアとして手づくり紙芝居運動も近年盛んになっている。

【参考文献】加太こうじ『紙芝居昭和史』（一九七一 立風書房）、子どもの文化研究所編『紙芝居—創造と教育性』（一九七一 童心社）、櫻本富雄・今野敏彦『紙芝居と戦争』（一九八五 マルジュ社）

上笙一郎

しょういちろう

一九三三—

(昭八)

評論

(上地ちづ子)

家、児童文化史・児童史研究者。本名山崎健寿。埼玉県飯能市内の山村に生まれる。高校を中退し、各種学校の文化学院卒。長い文筆生活を経て一九八七年より梅花女子大学児童文学学科講師。菅忠道『日本の児童文学』（一九五〇）に触発されて児童文学評論に入り、その後児童文化の研究、児童史研究の提唱へと領域を広げる。資料博搜、問題意識の幅広さ、科学的史観に立つ体系性に特長をみてよいであろう。主著には、児童文化方面では『童謡のふるさと』二卷(六二)、『日本のわらべ唄』(七二)、『日本の児童文化』(七六)、『児童出版美術の散歩道』(八〇)、『児童文化書々游々』(八八)。児童文学方面では『未明童話の本質』(六六)、『テレビと幼児』(七〇)、『児童文学概論』(七〇、中国訳は八三)、『日本児童文学の思想』(七六)。児童史に『満蒙開拓青少年義勇軍』(七三)、『日本児童史の開拓』(八八)。女性史研究者である妻山崎朋子との共著に『日本の幼稚園』(六五)、『光ほのかなれども』(八〇)があり、編著も多い。日本児童文学者協会・日本児童文学学会の理事を務め、研究の指導と実践、新人評価などに実績のあることも留意される必要がある。

上司小剣

かみつかさ

一八七四—

一九四七(明七—昭二二)

(宮崎芳彦)

小説家。本名延貴。奈良県出身。大阪予備校を中退し、代用教員となるが間もなく堺利彦を知り、義兄堀紫山の紹介で読売新聞社に入る。以後二四年間在社。代表

作は『木像』(一九一〇)、『鱧ばちの皮』(二四)、『東京』三部作(二二)など。児童ものの好評作品には、『豚のぼけもの』(一九)、『西瓜どろぼう』(二八)、『暮から野球へ』(二八)などがある。なお、雑誌『赤い鳥』に、『こだま』(二二)、『青い時計』(二四)、『雲雀と鳴』(二五)など二〇余編発表している。小説的なものと歴史読み物的なものがある。(鈴木敬司)

香山彬子 かやま あきこ 一九二四(大13) 児童文学作家。東京都渋谷区に生まれる。東京女子医科大学卒業。アフリカのシュヴァイツァーのもとで働くことを願い、女子医大に進んだが、卒業間際に病に倒れ、卒業後しばらく療養生活を余儀なくされた。アフリカへ渡る願いは果たせなかったが、その熱い想いと理想は子どもたちへのメッセージとなり、一九六〇年には『オーロラ天使』で東映テレビ脚本特別賞、六四、六五年にはNHKラジオおよびテレビ脚本に入選、六七年に『金色のライオン』『シマフクロウの森』(講談社児童文学新人賞佳作)で、児童文学の世界にデビューした。その作品はファンタスティックで、美しく、詩情にあふれている。それは作者のうちなる詩精神が生み出させた形態が童話という型を取ったからだろう。『ふかふかウサギシリーズ』(七三)、『風の中のアルベルト』(八一)、『ぶいぶい鳥シリーズ』など、楽しくて深い内容の作品が多い。(矢崎節夫)

唐沢富太郎 からさわ とみたろう 一九一一(明44) 教育学者。新潟県三嶋郡出雲崎町に生まれ、東京文理科大学を卒業。奈良女高師教授、東京教育大学教授、日本女子大学教授を歴任して、現在は創価大学教授。日本教育史を専攻して著書は多方面にわたっているが、とくに、『教師の歴史』『学生の歴史』(以上一九五五)、『教科書の歴史』(五六)、『図説 明治百年の児童史』(六八)、『教育博物館』(七七)などの大著において、文献のみならず遺品・遺物を博渉して、児童生活・文化の展開と教育の発達とのかかわりを具体的に究明した業績が注目される。(石川松太郎)

カラフィアート ヤン Jan Karafiat 一八四六(一九二九 チェコスロバキアのプロテストタントの牧師で名作『Bronci』ホタルの子(一八七六)の作者。チェコ・モラヴィア高地の小さな町イムラモフの生まれで、神学をベルリン・ボン・ウィーンで学び、その後ボヘミアの各地で務め、一八七五(九五)はモラヴィアのベルカー・ルホタで主任牧師。ホタルを主人公とした宗教色の濃い児童文学作品『Bronci』を書き、自然への愛と人間間の理想的関係を説いた。この作品は長期にわたるベストセラーになり、すでに八〇版を超え、プライスイヒ、*トゥルンカなど歴代の有名な挿絵画家により挿絵がつけられている。(邦訳『ホタルの子』オハリスの作家ホリガーのテキストによる)(千野栄一)

カリシエ アロワ Alois Carigiet 一九〇二ー スイスの画家、絵本作家。グラウビュンデン州の農家に生まれた。チューリヒで装飾画家として活躍中、一九四〇年に同郷の作家ヘンツと出会った。この出会いから、ヘンツのレートロマン語の文にカリシエの絵による、スイスの山の子どもたちの物語『ウルスリのすず』（一九四五）が生まれた。これに『フルリーナと山の鳥』（五二）、『大雪』（五五）が続き、「スイス三部作」として、世界の傑作絵本に数えられている。その後しばらく、カリシエの絵本活動は下火になっていたが、一〇年後の六五年に出た『Zottel, Zick und Zueg』ツォッテルとツィクと小人』以来、『Birnbäum, Birke, Berberitze ナシの木、シラカバ、ヘビノボラズ』（六七）、『マウルスとマドライナ』（六九）と二年おきに、羊飼いの少年マウルスの日常をテーマにした自作絵本を発表した。六年、カリシエの絵本画家としての作品全体に対し、国際アンデルセン賞が授けられた。

（佐藤真理子）

カリヤフキン ビクトール・B Виктор Владимирович Голывкин 一九二九ー ソビエトの児童文学作家。カスピ海のほとり、石油の町バクに生まれる。幼少より絵を描きはじめ、ドシヤンベの美術学校を卒業の後、レニングラードの美術学校へ入学。自分の絵に合わせて物語をつくり、『アスファルトの上の落葉』（一九七二）、『ぼくの大すきなパ・パ』（七二）、『きみ、ぼくのところへおいでよ』（七八）などを著す。彼の作品はユーモアのうちにも心打つものがあり、今も子どもたちに読まれている。

（富川やすえ）

カール エリック Eric Carle 一九二九ー アメリカの絵本作家、挿絵画家。子ども時代をドイツで過ごし一九五二年にアメリカに帰国したあと、新聞や広告のデザイナーとして活躍した。代表作『はらぺこあおむし』（一九六九）は、ページごとに穴が開けられ、その穴の数が増えていく仕掛けの独特の工夫がなされている。そのほか『Do You Want to be My Friend? ぼくの友だちになりたい?』（七一）などのように、色鮮やかなカラーシユからなる作品世界も異彩を放っている。

（定松 正）

カルヴィーノ イタロ Italo Calvino 一九二一ー 八五 現代イタリアを代表する作家。第二次世界大戦中にバルチザンとして参加した経験から、『くもの巣の小道』（二九四七）によってネオ・レアリズモの作家として出発した。代表作には『木のほり男爵』（五七）などがあるが、一方民話をへ大ロマンのデッサンとして捉え、それを『イタリア民話集』（五六）にまとめた。短編連作『マルコヴァルドさんの四季』（六三）は児童書としても出版された。

（安藤美紀夫）

カルドウッチ ジョズエ Giosue Carducci 一八三五ー 一九〇七 イタリアの詩人。退廃的な末期ロマン派

に抗して、荘重典雅な新しい古典派の詩風を打ち立て、一九〇六年のノーベル賞を受賞した。『魔神に捧ぐる頌』（一八六三）、『青春の季』（五〇―六〇）など多数の詩集の内容は政治、歴史、自然など多岐にわたる。批評活動を通して、あるいは教育現場で、文学教育にも熱意を示した。多くの詩が子どもたちにも愛唱されている。

（剣持弘子）

ガルドン Paul Galdone 一九一四―一九八六
ブタベスト生まれのアメリカの絵本作家、挿絵画家。『The House that Jack Built』ジャックの建てた家（一九六二）、『三匹の仔ブタ』（七二）、『The History of Mother Twaddle』トウォデルおばさんのお話（七五）など、その作品の大半は民話、昔話、わらべ唄に材を求めたもの。清楚で鮮明な線画に特徴があり、それが話の筋を流動的に展開させる。多彩な創作活動は、現代の作家の中では異彩を放っている。（定松 正）

カレワラ Kalevala フィンランドの叙事詩。一九世紀初頭、民族的自覚が燃えあがったフィンランドでは、しきりに民間に伝わる歌謡の採集が行われたが、ことに医師で文学者だったレンロットは国内はもとよりロシア領まで広く歩いて口碑、伝説、歌謡のたぐいを集め、その歌謡の中から内容的に連関のある一続きの叙事詩的作品を取り出して『カレワラ』を編んで一八三五年に刊行した。カレワラとはカレワの国の意で、

カレワは建国の英雄。原詩は七世紀から一〇世紀ごろになったものというが詩藻はきわめて豊かで格調も整い、叙事詩としてまれに見る優秀作となっていて、発表されるや世界に好評をもって迎えられた。主人公は吟遊詩人ワイナモイネンというべく、それに農夫や鍛冶屋、無垢の美女アイノ、死の国らしいポポロの女主人ロウヒらを配しているが、他の叙事詩のように武人や戦争を中心とせず、歌の力がすべてに優越し、汎神論的世界観のうちに悲劇や争いをも包みこんでいるのが、平和を愛するフィン族のものらしい特色だ。これに付したガレン・カレラの挿絵も有名で、児童向きに再話した作も多い。古くは森本覚丹訳があつたが、今は小泉保訳が岩波文庫に入っている。（山室 静）

河井醉茗 すかいめい 一八七四―一九六五（明7―昭40）

詩人。本名又平。呉服商河井又兵衛の長男として大阪府堺市北旅籠町に生まれる。少年時代「少年園」や「いらつめ」を愛読して新体詩や短歌に興味をもち、一八九三年二月「少年文庫」に詩『亡き弟』を発表、続いて『紅葉』（一八九四・二二）、『新年』（九五・二）が同誌に掲載され、山縣悌三郎に認められる。山縣の招請で上京。「少年文庫」は一八九六年から「文庫」と改題し、大人向け雑誌となったが、彼は九月からその記者となり、一九〇七年まで詩欄を担当して選評を行い、文庫派と呼ばれる詩派をつくりあげた。その後、電報新聞

社、「女子文壇」編集、婦人之友社を経て三〇年女性時代社を創立。「女性時代」を創刊して、女流詩人の育成に当たる。その間に「小学生」「子供之友」「新少女」「婦人之友」「少女俱樂部」「ゴドモアサヒ」「ゴドモクニ」「少女の友」などに多数の童謡を発表。単行本には「神代のおはなし」(〇二)『少年世界文学3』、『はまぐりの草紙』(〇三)『少年世界文学7』、『日本立志物語』(二八)『日本児童文庫39』などがある。三七年帝國芸術院会員となる。

河合隼雄かわい はやお 一九二八(昭3) ユング心理学者。兵庫県篠山生まれ。京都大学数学科卒業。のちに臨床心理学に転じ、ユング派精神分析家となる。

ユング派は、昔話や神話に秘められた人間の無意識のイメージから、心の内的世界に接近するが、河合も内外の昔話や神話、さらに児童文学の作品を分析し、心の諸問題を、文化論の視座から評論している。『昔話の深層』(一九七七)、『昔話と日本人の心』(八二)などの評論集がある。

川内康範かわうち やすのり 一九二〇(大9) 作家。北海道函館に生まれ、小学校卒業後、労働をして独学。

上京後、中河与一、富沢有為男に師事。中河主宰の『文芸世紀』に小説を発表し、詩誌「ぶらい」を発行した。テレビ映画『月光仮面』の原作で広く知られ、漫画化もされて、「少年クラブ」「少年マガジン」に連載。テ

レビ、ラジオ、漫画が結びつき立体化する新傾向の先峰であり「正義の味方」ということばを流行させた。ブラウン管が生んだ最初の子どものヒーローが月光仮面で、ストーリーは単純明快、オートバイに乗るところが斬新だったエンターテインメント。(北川幸比古 川上四郎かわがみ しろう 一八八九-一九八三(明22-昭58)

童画家。新潟県長岡市郊外の農村の生まれ。長岡中学校卒業後、東京美術学校西洋画科へ入学。一九一三年卒業、研究科へ進学するが、同年末、静岡県榛原中学校に奉職。図画の教師となる。一六年ゴドモ社に入社し、童画を描きはじめる。「ゴドモ」「良友」「童話」など児童雑誌の挿絵を担当。とくに千葉省三編集の「童話」では、表紙や口絵を描く一方投稿図画の選評もしている。二七年秋「日本童画家協会」の設立に当たっては、その芸術性を認められて会員に推された。ペンを生かした細かい線描に特徴がある。牧歌的な風景、農村の子どもの姿を好んで題材にし、心和む画風を確立した。このころの代表作に、『未明童話集』第二巻(一九二七)の挿絵、千葉省三の『トテ馬車』(二九)の口絵。『ワンワンものがたり』(二九)の装丁・装画などがある。四五年越後湯沢へ疎開。三二、三年ごろからみられた写真的傾向は、戦後ますます強くなり、その克明な描写は驚嘆に値する。戦後の代表作に『良寛さま』(五五)、『良寛さま』(七五)、『川上四郎童画大集』(七七)

がある。晩年の良寛への傾倒は、若くからの念仏宗信仰が影響している。四二年に第二回野間挿絵奨励賞を受賞、また、七〇年には久留島武彦文化賞を受賞している。八三年一二月、後半生を過ごした湯沢で永眠、九四歳であった。童画草創期に、初山滋、*武井武雄らとともに「童画」を確立した功績は大きい。

【参考文献】『日本童画の父・川上澄生回顧展』（一九八七 長岡市立中央図書館）
（深川明子）

川上澄生 かわかみ すみお 一八九五—一九七二（昭28）（昭47）

画家、詩人。横浜市生まれ。青山学院高等科を卒業後、カナダ、アメリカに滞在。一九一八年帰国後、宇都宮中学などの教師をしながら木版画を制作し、異国情緒豊かな独自の作風で注目された。二〇代には「赤い鳥」に童謡を投稿し、入選作は一〇編。子ども向けに『兎と山猫の話』（一九四六）を著したほか、児童書の挿絵・装丁も行った。なお、ユニークな業績として幼年回顧の画文記録『明治少年懐古』（四三三）、明治初期の挿絵を研究した『版画』（五七）がある。『川上澄生全集』全一四卷（七八—七九）がある。（畑中圭一）

川上眉山 かわかみ びざん 一八六九—一九〇八（明2—明41）

小説家。本名亮。大阪生まれ。幼時両親とともに上京し、府立一中、進文学舎を経て、東京大学予備門に入る。一八八六年、尾崎紅葉らの硯友社同人となる。若い日は意気軒昂だったが、家の没落に遭い、厭世的と

なり「文学界」同人と交わる。九五年、日清戦争後、

『大きかづき』『書記官』など、従来の作風を脱し、観念小説として評判となった。晩年、地主对小作人や村八分など社会性のある長編『観音岩』（一九〇三）を発表したが、一九〇八年六月一日自殺、社会に衝撃を与えた。児童文学としては、博文館の『少年文学叢書』第六編に『宝の山』（一八九二）がある。貧しい堅三が大雪山に迷う旅の修行者を世話した報いに、南方千里に清華山なる仙境のあること、多くの苦境を突破すれば栄華を極めることができると教えられ、その試練の様を描く。この旅人は時期仙という仙境の主人であった。堅三の強い意志、実行力、次から次への難関克服が興を呼ぶ。（福田清人）

川北亮司 かわきた りよあき 一九四七—（昭22—） 児童文学作家。東京都荒川区に生まれ、早稲田大学文学部卒業。一九七〇年、在学中に『はらがへつたら じゃんけんぼん』を出版、七一年に第四回日本児童文学者協会新人賞受賞。大衆社会化状況、人間疎外状況の中で人間が孤立化しているといわれる時代風潮の中で、その風潮をはね返すかのようにエネルギーに友を求め、人と人とのつながりを求める子ども像をナンセンスの手法で、この作品は力強く描き出した。この手法は幼年童話に独自の世界を切り拓き、『ふにふにむにょらっ』（一九七三）などの作品にも受け継がれる。一

方、七三年『街かどの風』では下町を舞台に、貧しさ寂しさに耐えつつ、他者への優しさを失わず成長する子どもをリアリズムの手法で描き出し、これは『はじめてのコンサート』（七八）などの作品に受け継がれている。新たな子ども像を現実生活の中から手法こそ違え彼は提示してみせた。

（大岡秀明）

川口半平 一八九七～（明30～） 教育者、

作家。岐阜県に生まれ、岐阜師範卒業後、訓導、校長、県視学など歴任したが、その間生活綴方運動に尽力する。戦後、村長、県議、県教育長に推されたりしたが、一九六一年後輩に呼びかけて、岐阜児童文学研究会を結成。七二年児童文学月刊誌「コボたち」を発行。主な作品に、『山のコボたち』（一九六三）、『なみだをふけ門太』（六八）などのほか、郷土の歴史物語が数多くある。

（赤座恵久）

川崎大治 一九〇二～八〇（明35～昭55） 児童

文学作家、紙芝居作家、児童文化活動家。札幌市に出生。本名池田政一。ほかに十郷鉄夫。幼少時は民話・物語・お伽噺に親しみ、一五歳で児童文学に志し、子ども会を組織し月刊回覧誌発行。上京し巖谷小波、竹貫住水に師事、月刊「ササナミ」の編集発行に当たる。一九二三年早稲田大学英文学科入学。実家が破産し弁護士宅の書生となり社会主義に開眼。関東大震災罹災児童に多量の子どもの本を放出。卒論はイエーツ。こ

のころより童話の理論研究に関心をもつ。東京大学聴講生として高橋順二郎に原語でインド古典を学ぶが経済的に挫折。小波のお伽噺から未明童話へ関心を広げ、蔵原惟人の理論に学ぶ。一九九年新興童話作家連盟に加入、街頭実演を経験。日本プロレタリア作家同盟で「少年戦旗」の編集に参加。楨本楠郎他とプロレタリア童謡集『小さい同志』（一九三二）を刊行。日本労働援会本部児童部担当として無産託児所、児童救援、子ども会に従事。三三年七月検挙、年末まで留置。三五年童話作家協会会員となる。三六年農繁期保育所参加より作品と記録に新境地を拓く。保育問題研究会で城戸幡太郎に学ぶ。四二年日本少年国民文化協会幹事。自作紙芝居を携え新潟の疎開児童を慰問。敗戦後は各種文化団体の創設に参加、四六年児童文学者協会設立に参画。紙芝居のほか、映画・演劇活動も展開する。五〇年教育紙芝居研究会、五一年教育文化研究所、六七年むかしむかしの会を創設、幼年童話や昔話へ情熱を傾ける。六三年より東京家政大学教授、七二年日本児童文学者協会会長に就任。終生、理論と児童文化活動に裏付けられた創作態度を貫いた。主な著作に、童話集『ピリピリ電車』（三七）、『太陽をかこむ子供たち』（四〇）、『雪山の煙の下に』（四八）、記録『村の保育所』（四二）。編著『ね、おはなしよんで』（六二）、民話叢書『日本むかしむかし』（六六）、紙芝居『太郎熊次郎熊』（四二）、『池

にうかんだびわ』(六二)ほかがある。遺品の蔵書・資料は大阪国際児童文学館に寄贈されている。

「夕焼の雲の下」くもやけのた 児童小説。初出一九三八年一〇月四日〜一日「東日小学生新聞」(「東京日日新聞」連載、『太陽をかこむ子供達』に収録。ポロ買い・百姓・金持ちの三つの階層に属す子どもが、百合根をめぐって起こす葛藤を、心理と行動に自然の美を配した傑作。

【参考文献】向川幹雄「川崎大治解説・菅忠道「川崎大治さんの思い出」(一九七八『日本児童文学大系30』ほるぷ出版)、上笙一郎・山崎朋子「川崎大治と秋田県旭村農繁保育所」(一九六五『日本の幼稚園』理論社)。(斎藤寿始子)

川崎 洋かわさき ひろし 一九三〇〜(昭五〜) 詩人。東京に生まれる。西南学院専門学校英文科中退。中学のころから詩作をはじめ、茨木のり子と二人で『權』(一九五三)を創刊する。さまざまな詩美とことばの検索をしているいわゆる音楽型の詩人。ことに少年詩には、ことば遊び的な楽しさをもったものが多い。詩集に『川崎洋詩集』(六八)、『祝婚歌』(七一)、『食物小屋』(八〇)。少年詩集に『しかられた神さま』(八二)、童話集に『ぼうしをかぶったオニの子』(七九)がある。

川島はるよかわしま はるよ

(吉田定一)

川尻泰司かわせり たいじ 一九一四〜(大三〜) 人形劇作家、人形劇研究者。東京に生まれ、旧制府立八中に在学中、兄の川尻東次の影響により人形劇団ブークの活動に参加。一九三一年劇団員となり、美術、人形製作、演出をはじめ戯曲『こぼんいただき』を創作。日本の伝統人形の構造と手使い人形を組み合わせた両手使い人形を創案し、表現の幅を広げる。戦後は人形劇の芸術の可能性を求めて『百姓イワンものがたり』『昔話桃太郎』『みにくいアヒルの子』『彦一とんち話』『青い鳥』などを発表。五三年には日本最初のカラー人形映画『ゼロ弾きのゴロシユ』をはじめ『アラジンの不思議なランプ』『月の物語』『アラビアン・ナイト』を制作する。六一年、棒使い人形劇『逃げだしたジュピター』で文部省芸術祭演劇部門奨励賞、六七年に日本の児童文化の向上に功績があったとして第二回モービル児童文化賞、八〇年に怪談噺『牡丹燈籠』で芸術祭大衆芸能部門の大賞を受ける。現在、人形劇団ブーク代表、ウニマ(国際人形劇連盟)副会長。代表作『ドン太

の樽屋』『ファウスト博士』『人形日本風土記』ほか多数。子どものための人形劇の著書に『人形劇の本』(一九五六)、『人形劇ノート』(六八)、『絵で語る人形劇セミナー』全四巻(八三)、『現代人形劇創造の半世紀』(八四 共編)、『日本人形劇発達史・考』(八六)がある。

(宮尾慈良)

川尻東次 かわじり とうじ 一九〇八(三二)明41(昭7) 童画家、人形劇団ブーク創立者。川尻泰司の兄。東京に生まれ、開成中学在学中に、童画家の岡本帰一に師事。

『子供之友』『少年戦旗』『世界童話大系』などに挿絵を描く。一九二六年タナ人形座、二十七年に人形クラブで美術と演出・人形製作を担当し、人形劇にかかわる。

二九年、人形劇団ブークの創立となる上演を人形クラブで旗上げる。創作戯曲に『狼の目薬』『裸の王様』がある。二三歳で病歿。

(宮尾慈良)

川路柳虹 かわじり りゅうこう 一八八八(一九)五九(明21)昭34 詩人、美術評論家。本名誠。京都美術工芸学校を経て、東京美術学校を卒業。「詩人」(一九〇七・九)に我が国初の口語詩を発表。詩誌「現代詩歌」「炬火」などを主宰、平戸廉吉、萩原恭次郎、村野四郎らを輩出した。

『幼年世界』『コドモアサヒ』ほかに童謡を発表。童謡集『鸚鵡の唄』(二六)、『少年少女新曲集』(二五)がある。『路傍の花』ほか詩集多数。詩論、美術評論、随筆も多い。

(尾上尚子)

川端康成 かわはら やすなり 一八九九(一九)七二(明32)昭47 小説家。大阪生まれ。東京大学国文科卒。一九二四年、

横光利一、片岡鉄兵らと「文芸時代」を創刊。新感覚派の作家として注目され、第一創作集『感情裝飾』(一九二六)に載せたような多くの珠玉の掌の小説のほか、

抒情的な『伊豆の踊子』(二六)、躍動的な『浅草紅団』(二九)三〇)などを発表。憂うつな社会の到来の中で『禽獸』(三三)のような虚無的作品を書いたが、『雪国』(三五)四七)などを手がかりに虚無を脱出、戦後は伝統美への傾斜を強めながら、『千羽鶴』(四九)五一)、

『山の音』(四九)五四)、『名人』(五一)五四)などの名作、晩年は『眠れる美女』(六〇)六一)、『たんぽぽ』(六四)六九)などの問題作を書いた。孤児として育ち、とくに愛の種々相、その光と影に思いを潜めた作が多い。六一年文化勲章、六八年ノーベル文学賞を受賞。

子ども向けの作品では『少年倶楽部』発表の『級長の探偵』(二九)、『少女倶楽部』発表の『愛犬エリ』(三二)、『開校記念日』『学校の花』(三三)、『少女の友』連載の長編少女小説『乙女の港』(三七)三八)、『美しい旅』(三九)四二)などがある。『美しい旅』は盲目で啞の三重苦の少女の物語。また『模範綴方全集』全六巻(三九)の綴方選に従って以来、児童の文章に興味を示し、『赤とんぼ』など多くの児童誌の綴方選に従った。

【参考文献】羽鳥徹哉『川端康成解説』(一九七七)『日本児童文学』

大系23』ほるぶ出版)

(羽鳥徹哉)

川端龍子

かわはた りゅうし

一八八五—一九六六(明18—昭41)

画家。本名昇太郎。和歌山県出身。東京府立三中を中退、白馬会研究所そのほかに西洋画を学ぶ。のちに日本画に転向し、一九二九年に青龍社を興して主宰、昭和期日本画壇の一方の雄となった。画家として認められる以前、明治末期から大正中期までの龍子は、児童出版美術家として活躍。実業之日本社の専属画家として雑誌「日本少年」「少女の友」などに優れた表紙絵・口絵・挿絵を描いたほか、絵物語や双六、切りぬき細工などの洒落た付録にも力を注ぎ、読者の人気を呼んだ。巖谷小波との合作の絵本、ギャラリー吾八発行の木版千代紙など、いずれも龍子の豊かな趣味と才能を示している。

(アン・ヘリング)

河村光陽

かわむら こうやう

一八九七—一九四六(明30—昭21)

童謡作曲家。本名直則。福岡県に生まれ、小学校教師を経て、東京音楽学校選科卒業。作曲を藤井清水に師事、その影響を受け、作品には、日本の音楽の要素が生かされているものが多い。一九三〇年ごろから、放送やレコードなどによる児童音楽の分野で活躍した。主な作品には『うれしいひなまつり』(サトウハチロー詩)、『グッドバイ』(佐藤義美詩)、『仲よし小みち』(三苦やすし詩)、『かもめの水兵さん』、『赤い帽子白い帽子』、『船頭さん』(以上、武内俊子詩)などがある。(天畑祥子)

川村たかし

かわむら たかし

一九三一—(昭6—)

児童文

作家。本名隆。五條市に生まれ、五條高校を卒業後、篤農家の父を助けて家業に従うが、翌年奈良学芸大学に入学。卒業後小、中、高の教員を経て、梅花女子大学教授。六三年、花岡大学らと同人誌「近畿児童文化」を発刊、同誌によって児童文学作品を発表する一方、小説同人誌「空気」にも参加。生地の五條市に住み続け、ダム建設によって巻き起こされる山村の人間模様を描いたデビュー作『川にたつ城』(一九六八)以降、紀州大地の鯨漁に取材した『最後のクジラ舟』(一九六九)、『ノルウェーから来た鯨とり』(一九七九)、さらに『凍った猟銃』(七二)、『熊野海賊』(七七)など、紀伊半島を舞台にした作品を書き続けているが、それは決して川村が狭い意味での「郷土作家」であることを意味しない。第一六回野間児童文芸賞、一九八〇年国際アンデルセン優良作品賞を受賞した短編集『山へ行く牛』(七七)の標題作『山へ行く牛』は、冬の間山の村に貸してやる飼いや牛を、出征した父に代わって村の人々とともに送っていく少女と牛の交流を描いたものだが、時代や生活の重さを感じさせながらも、そこに決して塗り込められていない少女の人間像がくっきりと浮かびあがってくる。この作品を含め、川村の作品がきわめてオーソドックスなタッチでいて決して平板でないのは、骨太なストーリー性、重厚な文体といった要素の

ほかに、彼が舞台としている紀伊半島が、農村的な風土というよりも、吉野・熊野に代表されるように、山地や海を背景に日本史の中でも独特の役割を果たしてきた土地柄であることよって、にも思える。

このほか、自身の旧制中学時代を下敷きにした『戰場からきた少年たち』(八四)、長く在職した夜間高校に集まる生徒たちを描いた『昼と夜のあいだ』(八〇)などの創作、『児童文学の方法』(八三)などの論考がある。また八一年、加藤多一、那須正幹らと同人誌「亜空間」を創刊し、多くの新人を育てている。

「新十津川物語」しんかつがわ ものがたり 長編児童文学。一九七七年、『北へ行く旅人たち』を第一巻としてスタートしたこの物語は、全一〇巻四〇〇枚をめざす児童文学史上類をみない大河ドラマである。一八八九年(明22)、奈良県十津川村が大洪水に襲われ、家と土地を失った人々は新天地を求めて北海道に移住する。第一巻では九歳であった少女フキが、七巻「吹雪く大地」では一人の孫に囲まれた「婆ンちゃ」となり、フキの苦難の歴史を軸に日本の近代を照射する物語となっている。

(藤田のぼる)

河目悌二ていかめ 一八八九〜一九五八(明22〜昭33)画家。愛知県生まれ。一九二三年、東京美術学校西洋画科卒。二〇年代から童画家、挿絵画家として活躍する。「少年倶楽部」「少女倶楽部」などを中心にユーモア小

説の挿絵を描き、品格のあるユーモラスな画風で親まれた。代表作には佐々木邦の『苦心の学友』(一九二七)・二九「少年倶楽部」、『トム君・サム君』(三三、同)、サトウハチローの『僕等の拍手』(三五、同)などがある。(富田博之)

韓丘庸かんきゆう → ハングケヨン

神崎 清かみざき きよし 一九〇四〜七九(明37〜昭54) 社会

評論家、近代文学研究家、少年少女小説作家。筆名島本志津夫。高松市の河野家に生まれ、翌年神崎家の養子となる。神戸市に育ち東京帝国大学国文学科卒業。大阪高校在学中から藤沢桓夫らと同人誌「辻馬車」を発行し東大入学後は芥川龍之介に師事。作家を志すが芥川の死を転機に評論に向かう。一時教職についた後執筆に専念。明治文学、大逆事件、婦人問題、売春問題、基地問題など幅広い研究と活動で知られ、『戦後日本の売春問題』(一九五四)、『革命伝説』(六〇)、『大逆事件』(六四)ほか多くの著作がある。また「婦人公論」「新女苑」などへの寄稿も多い。児童文学関係では一九三三年ごろより「少女の友」の編集企画に参与。自身もたびたび寄稿したが「少女文学教室」(連載三八年、出版三九年)は内容の高さと働く少女の自学のためという視点で注目されてよい。なお同誌に島本志津夫の名で読切連載(三三〜四二)した少女小説(シリーズ名は数度変わり『黒板ロマンス』に落ちついた)は自身の体験を生

かし女学校教師「僕」が語る形で少女の生活を描く。内容は物語型とルポルタージュ型に大別されるが明るいタッチと豊かな社会性は共通している。これらの作品は『黒板ロマンス』(三九)、『女学生時代』(四三)などに収録。同誌には相馬黒光伝『宮城野の春』も連載(四二)したが中断した。ほかに『少年白虎隊』(四三)などもある。児童憲章の制定に参加、日本子どもを守る会副会長を長く務めた。七九年三月二日死去。

神沢利子

かんだら

一九二四(大13) 児童文

(遠藤寛子)

学作家、童謡詩人。福岡県戸畑市に生まれる。六人兄妹の五番目。炭鉱技師の父の転任に伴い、東京、北海道、樺太と移り、樺太庁豊原高女二年の夏上京し、自由学園普通科を経て文化学院美術部入学(一九四〇)。のちに文学部に転部し、田村隆一、中桐雅夫、堀田善衛らの同人誌「詩集」に参加。一九四四年、結婚して西宮市に住み、二女出産後、逗子、横浜市へと移り、同人誌「だ・かぼ」に参加。再発した結核で左肺切除後の療養をしつつ、NHKで童話や童謡を発表。六〇年、雑誌「母の友」に『ちびっこカムのぼうけん』を書く。翌年理論社より単行本として出版。サンケイ児童出版文化賞推薦となる。冒険と空想に満ちた新しい児童文学と高く評価され、また神話的骨格のこの物語は、現代児童文学の出発期を飾った空想物語の傑作と

もいわれている。この延長上に、本格的ファンタジー『銀のほのおの国』(七三)がある。いずれも樺太での幼年体験を色濃く反映させたファンタジーだが、その後の自伝的な小説『流れのほとり』(七六)では、二九年から三七七年までの樺太内川での小学生時代を、『いないばあや』(七八)では、さらに幼年期をさかのぼり、二・三歳から五歳まで過ごした札幌時代へと、作者の眼は「幼年の日の暗黒と金色を今一度確め」るために、生の原点としての幼年期へとますます収斂していく。

神沢はまた、こうした物語性豊かな世界と平行して「ストーリー性によりかからず、もつと端的にものの本質に迫る仕事は出来ないものか」と、幼年童話の中にかつて放棄した詩に近い仕事を試みようとしたのが『くまの子ウーフ』(六九)である。幼年童話といいながらも、ここには人間存在の根幹にかかわるモチーフがみとれる。それは神沢文学の根底を流れる普遍的なテーマだともいえよう。『むかしむかしおばあちゃん』は『空色のたまご』(八五)などは、神沢文学の縦軸にある生の始原への遡行と詩性の結実とみる。

「銀のほのおの国」おんのくに 長編ファンタジー。雑誌

「母の友」一九六八年四月号〜七〇年三月号に連載。

七二年一月、福音館書店より単行本として刊行。『ちびっこカムのぼうけん』の延長上に位置する長編ファンタジー。青いヌ王(オオカミ)によって滅ぼされたト

ナカイ王国復興のための闘いに巻き込まれた兄妹の姿を通して、生ある者の果てしない闘い、自然の摂理の中で人間存在の原点を厳しく追求。(野上 暁)

勸善懲悪 ちかんせんあく 儒教倫理の一表現で、文学は善を勧め悪を懲らす道徳的な目的を第一義とするという考え。略して勸懲ともいう。近世文学はこの考えが支配的で、坪内逍遙が『小説神髓』で滝沢馬琴を批判して以来、近代文学はこの考えの否定からはじまった。一八九一年刊行開始の『少年文学叢書』は、その主旨に「愉快にして且つ勸懲的なる物語を以て」「家庭教育の助」とするといひ、戯作文学に惹かれる硯友社同人中心に執筆を依頼、第一編『こがね丸』は馬琴流の文体によるまさに勸善懲悪の仇討ち物語であった。当時その内容を批判した『女学雑誌』にしても、八八年「子供のはなし」欄開設に当たり、外国にはオルコットのようないく「数多のお談しを記せる書物ありて子供に勸懲の旨を面白く教ゆるの道」があると述べた。明治期にはこれが児童文学への一般的な考え方であり、だから直ちに「徳目主義をめざす政府の教育行政に適應」することになり、「後の『おもしろくてためになる』という大衆幼年雑誌の宣伝文句につながって」(統橋達雄)いく。巖谷小波自身も自らのお伽噺を「勸善懲悪主義に偏して」といふとみて、その登場を待っていた「進んだ少年文学」は、小川未明以後近代童話の形をとつ

た。その一方勸懲主義は『立川文庫』の講談小説や「少年倶楽部」などの時代小説に受け継がれていく。歴史に材を取った小説が勸懲調から脱却するのは、戦後民主主義社会になってからである。(勝尾金弥)

姜小泉 ソウケン 名全烈 一九一五—六三 韓国の

童謡詩人、童話・少年小説作家。咸鏡道で生まれ、教員生活を送り、児童雑誌や新聞での童謡の入選を契機に一九三〇年ごろから創作活動に入り、成果はロマン的な童謡詩集『かほちやのちようちん』(一九四二)にまじり結実した。朝鮮戦争時に越南。その後数年は郷愁漂う童話が多く、その後は教化性の強い少年小説に傾いた。文教部編集官、児童雑誌の主幹、文学者協会児童文学分科委員長、児童文学研究会会長などを歴任した。(仲村 修)

菅 忠道 たかみち 一九〇九—七九(明42—昭54) 児童

文化・文学研究家。東京牛込区(現新宿区)に生まれる。父は職業軍人。五高在学中から口演童話に関心をもち、また社会科学の文献を読む。東京大学教育学科に進学、ピオニール運動、労働運動に参加、その体験を柳瀬浩のペンネームで「新興教育」(一九三〇・一〇)に発表。一九三二年東大中退。社会運動に参加して逮捕されるが、起訴保留となり札幌に帰る。この時期、児童文化史、児童史研究を手がけ、「明治以降に於ける児童文学研究の発達」(二六—三七「児童芸術研究」)などを発表、その

後の研究活動の基礎をつくる。三六年「教育」の編集部に勤務しつつ、児童文化・教育問題に関する論文を発表。また教育科学研究会、保育問題研究会の結成に参加、右傾化する時代に抵抗を示した。四三年治安維持法違反で逮捕されたまま敗戦を迎え、四五年九月出獄。戦後、児童雑誌の編集に従事し、自らも作品を書き、児童文学者協会、日本子どもを守る会の結成にも参加し、民間における児童文化運動を推進した。また『日本児童文学大系』全六巻(五五)を編者の一人として編み、児童文学史の資料整備をなして、その後の史的研究の礎石となった。そして五六年に刊行された『日本の児童文学』は昔のそれまでの史的研究の集大成であるだけでなく、日本児童文学における価値のある研究であった。ほかに『児童文化の現代史』(六八)、『自伝的児童文化史』(七八)があり、歿後に『菅忠道著作集』全四巻(八四)が出た。

姜孝淳 ヒョクソン 号五全一九一五、朝鮮民主主義人民共和国の児童文学作家。黄海南道安岩郡の小さな農村に生まれる。学校教育に一生を送ろうと決意、教員生活に入る。朝鮮作家同盟中央委員、児童文学分科委員会所属。代表作は解放後に多い。『汽笛の音』(一九五一)、『楽しい夏』、『新しい担任の先生』(以上五四)、『たぬぎさんの新しい家』(五五)、長編に『二つの虹』(六一)、『分団委員長』(六二)など多数あり、抒情豊

かな作品には定評がある。(韓丘庸)

かな作品には定評がある。カンペ ヨーアヒム ハインリヒ Joachim Heinrich Campe 一七四六一八一八 ドイツの児童文学作家、教育家、言語学者、出版業者。北ドイツ、シュタットオールテンドルフ近郊デーレンセンに生まれる。ヘルムシュテット大学で神学を修め、一時フンボルト家の家庭教師となる。その後、バセドールの汎愛学舎の監督官となるが、一七七七年ハンブルクに移り、啓蒙主義の教育思想および博愛主義の教育原理を広めるため、旺盛な執筆活動に入り、また教育改革にも取り組む。デフォーのロビンソンを子ども向きに翻案した『Robinson der Jüngere ロビンソン二世』(一七七九〜八〇)をはじめ、子どもの成長発達段階を考慮した『Kleine Kinderbibliothek 児童小文庫』全一二巻(七八〜八四)、対話形式の旅行記『Die Entdeckung von Amerika アメリカの発見』(八一〜八二)など多数の著作を残した。晩年一〇年間は、主に言語研究に専念し、『Wörterbuch der deutschen Sprache ドイツ語辞典』(一八〇七〜一三)を著し、国語純化運動にも尽くした。カンペの死後一八二二年『Sämtliche Kinder- und Jugendschriften von Joachim Heinrich Campe カンペ児童文学全集』全三八巻が刊行された。(田中安男)

神戸淳吉 シカノキチ 一九二〇(大九) 児童文学作家。東京、神田に生まれる。日本大学専門部社会学

科に学ぶ。社会福祉施設などに勤めながら、「こどもペ
ン」^{*}「子どももの村」など児童雑誌に童話を投稿、一九五
〇年、いぬいとみこ、佐藤さとる、長崎源之助らと同
人誌「豆の木」をはじめめる。五五年より文筆生活に入
る。動物や野鳥に興味をもち、その生態をしつかり踏
まえた上で、人間とのかかわりを描いた作品が多い。
六四年に『子ばとのクウク』、『風の村』、六五年に『ゾ
ウのかばん』、六六年に『すずめの手紙』、六七年に『ジャ
ングルのはこぶね』などを出版したが、七一年に出し
た絵本『はしれクラウス』もそうだが、七二年の『大
仏建立物語』あたりからノンフィクション作品が目
立ってきた。石川光男、砂田弘、木暮正夫、岡本文良、
浜野卓也らとジュニア・ノンフィクション作家協会を
はじめたことが影響したかもしれないが、もともと神
戸には調べて書く性格があり、ノンフィクションに力
を発揮するようになった。『大仏建立物語』も優れてい
たが、七五年に出版した『元禄の白い塩』も、元禄忠
臣蔵を経済面から事件の核心に迫った力作である。ク
リスチャンの神戸にとって当然のことかもしれない
が、最近はキリスト教関係の作品が多い。八二年に『愛
をつたえた青い目の医者へボン』、八三年に『キリスト』
『新渡戸稲造』などがある。八二年、ノンフィクショ
ン児童文学の会設立、会長になる。

(長崎源之助)

キ

木内高音 たかね 一八九六—一九五二(明29—昭26) 雑
誌編集者、童話作家。長野県出身、早稲田大学英文科
を卒業。鈴木三重吉主宰の赤い鳥社に入り、編集に従
事、その後も一貫してジャーナリストの道を歩み、中
央公論出版部長、「婦人公論」編集長などを務める。児
童文学創作は自身のかかわった「赤い鳥」にはじまり、
処女作『お耳の葉』(一九二三)以下三〇編を同誌に発
表。しかし、『水菓子屋の要吉』や『お化け倉の話』な
ど社会性のある数編の創作を別とすれば、多くは外国
童話の翻案ないしはそれにヒントを得たものであつ
た。「赤い鳥」終刊後は目立った作品はなく、第二次大
戦直後、友人藤田圭雄の編集した童話雑誌「赤とんぼ」
に、子どもたちの明日を切り拓こうとする生き方を描
いた「建設列車」を発表。作品集として「建設列車」
(四六)がある。なお、中央公論社在勤中に、鈴木三重吉
の『綴方読本』(三五)と豊田正子の『綴方教室』(三七)